

復刻版に掲載された写真をスキャンしたが、画質は低下している。  
詳細は、博物館や資料館などで原本を参照する必要がある。

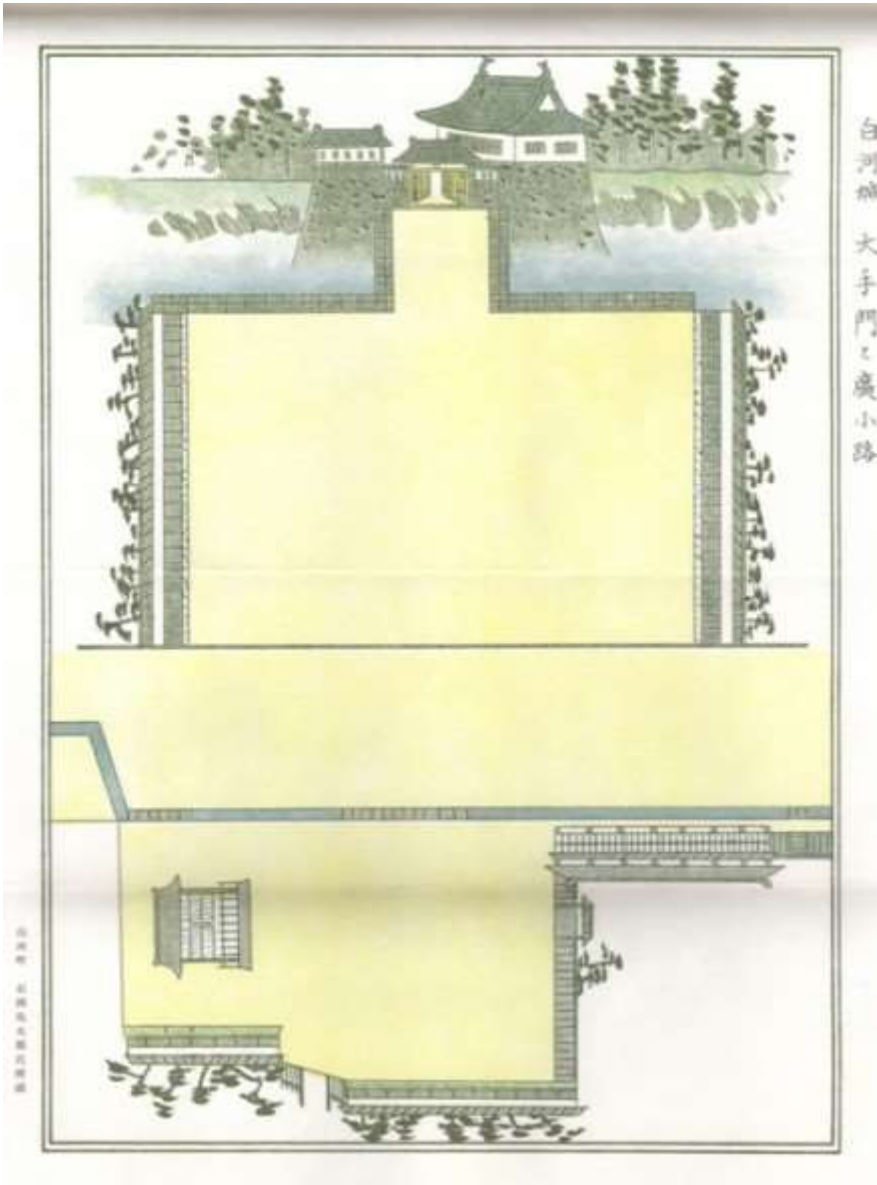
写真の順番や紙面上の配置は、復刻版のとおりではなく、変更した部分がある。

脚注の「⇒【 】」は、「戊辰白河口戦争記の訳」のブックマーク項目。

⇒ [戊辰白河口戦争記の訳](#)    ⇒ [戊辰白河口戦争記 学習ノート](#)

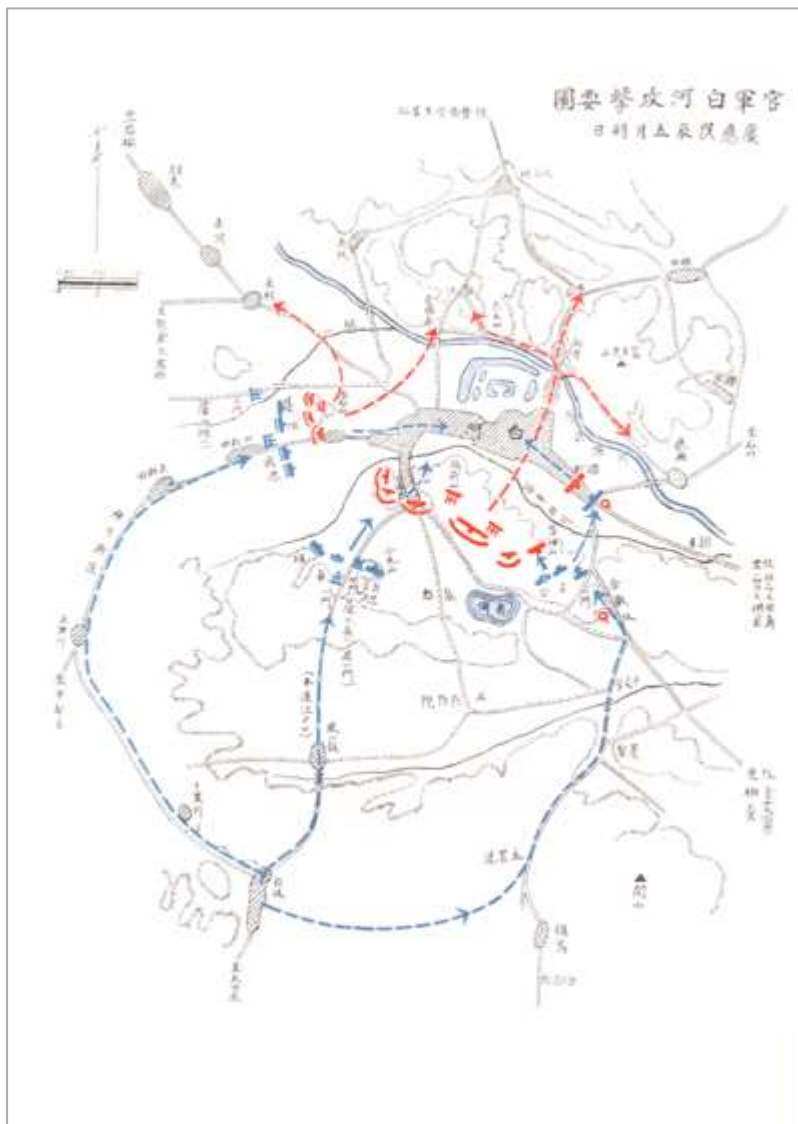
## ■復刻版巻頭 折り込み口絵

\* 白河城<sup>おおもん</sup>大手門<sup>ひろこうじ</sup>と広小路図（白河町石岡亀太郎氏所蔵）



かなり簡略な絵図だが、大手門は高麗門と櫓門を組み合わせた枅形になっているのが分かる。門前は広場（広小路）になっており、街道を挟んだ南側にも広小路は続いており、高札場（触れを掲示する）と番所らしい施設が設けられている。閏4月25日の戦いで討ち取られた西軍兵の首は、この広小路において晒されたものと思われる。

\*官軍白河攻撃要図

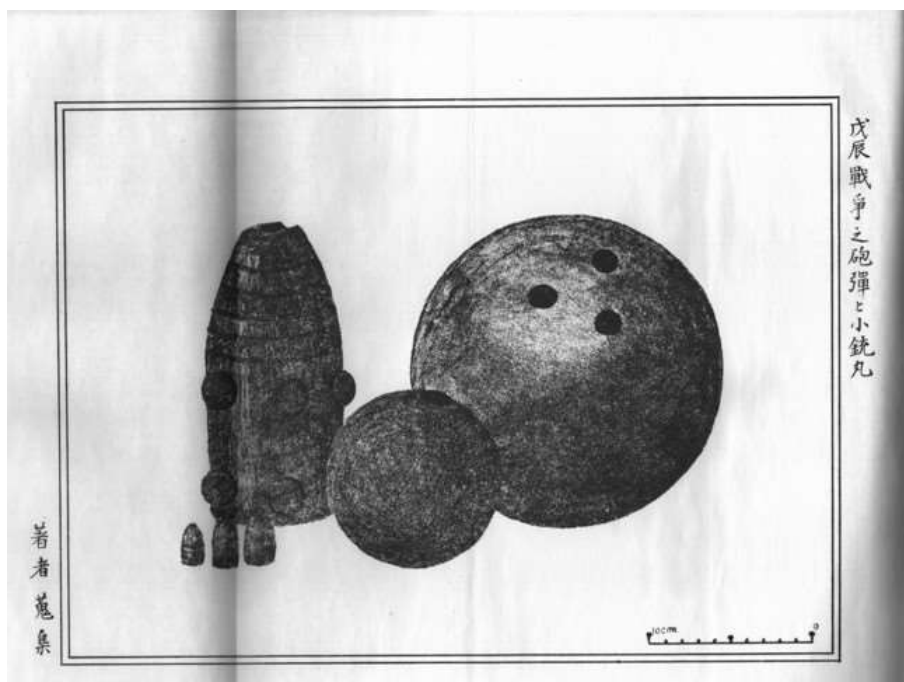


原著者自序に「大山元帥伝の付図なるを、特に大山家の御許を得て本書に転載したるもの」とある。

『戊辰役戦史』(大山柏著)の戦闘要図とは内容に若干差異がある。比較のこと。

[戦闘要図](#)

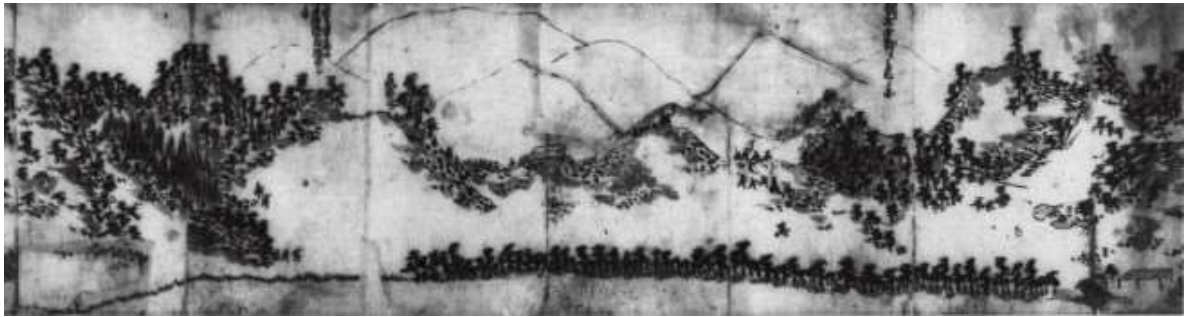
\*戊辰戦争之砲弾と小銃丸図 (著者<sup>としゅう</sup>蒐集)



これら砲弾は、原著者佐久間律堂氏の収集物であるということ。

## ■東軍・西軍

\*五月朔日<sup>きくじつ</sup> 日之出にて会津陣小屋繰出しの図（岡部文三氏蔵）



\*上掲図の部分拡大



「5月1日、日の出時に東軍が陣屋から出発する場面」ということらしい。西暦では6月20日にあたり、日の出は4時25分くらいと思われる。これは西軍との戦闘が始まった時刻より前なので、日の出を迎えて東軍が所定の持ち場に付くために宿所から出発したのだろう。西軍の包囲攻撃の策動には気づいていない。

『戊辰役戦史』によれば西軍の白坂出発は右翼隊が午前4時、左翼隊が6時、中央隊が8時（あるいは予定より早く6時）である。最初の衝突は、奥州街道途中の皮籠において、西軍中央隊と東軍斥候の間とのこと。

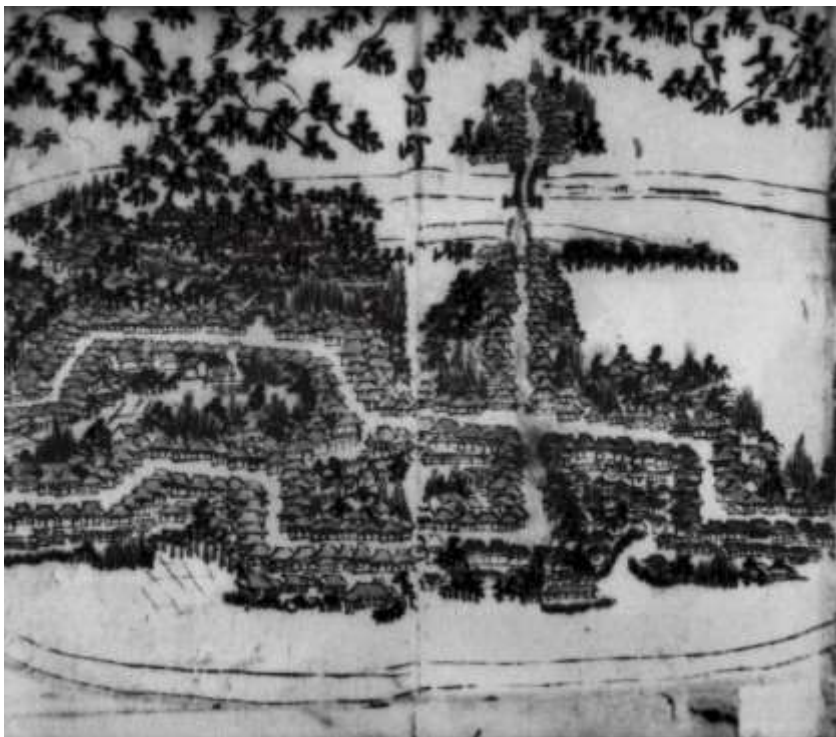
\*慶応四年辰五月朔日白河向<sup>むかいでら</sup>寺へ人数引揚の図（岡部文三氏蔵）



5月1日の戦闘に敗れて、東軍が阿武隈川対岸の向寺へ退却した場面らしい。負傷者を抱えてか、2~3人ずつ橋を渡ってきた者たちが向寺集落の手前に集結して、互いに安否確認するようである。向寺集落の外れ女石側に関門が設けられている。この関門は平時より設けられていたのだろうか？

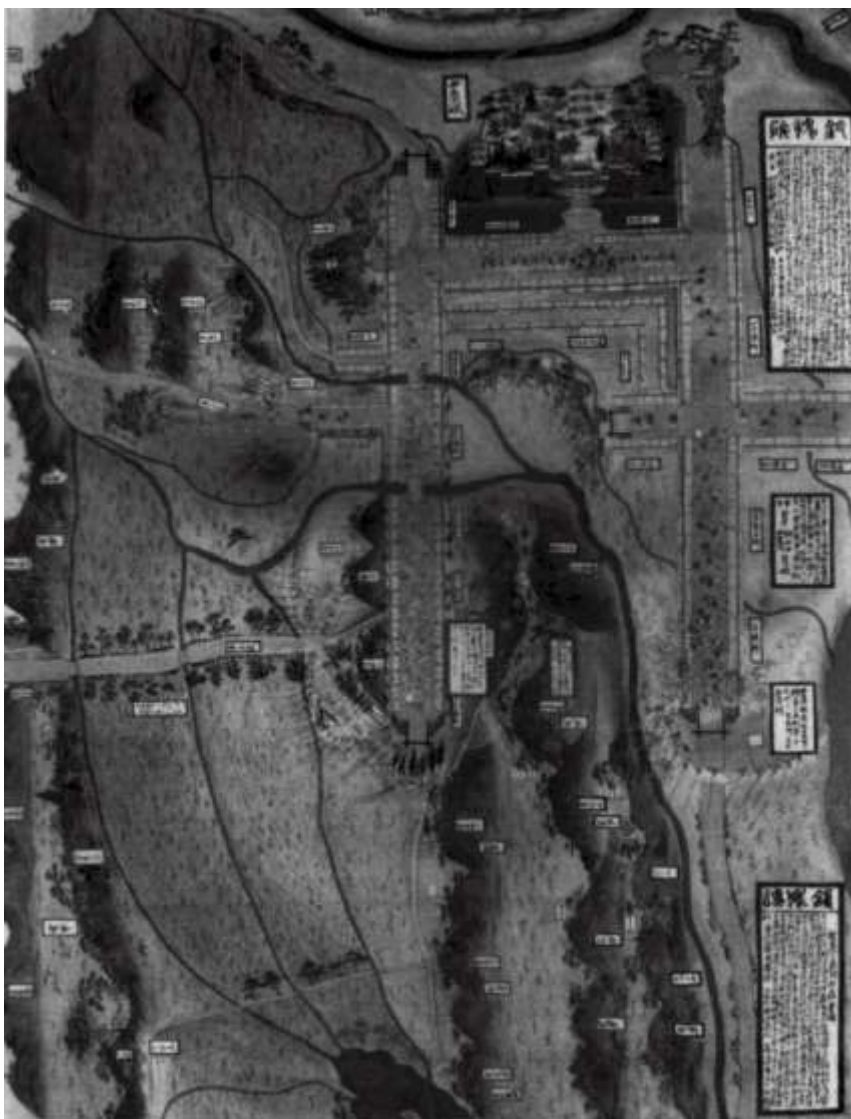
岡部文三：福島県地方史研究者

\*白河町図（岡部文三氏蔵）



10万石の城下町である。  
防備のため、町の通りが鉤の手状に屈曲している。  
左上のやや高所に建物があるのが白河城で、大手門前の広小路が見て取れる。  
右上、阿武隈川を橋で渡った対岸の集落が「向寺」である。

\*白河口戦闘の絵図

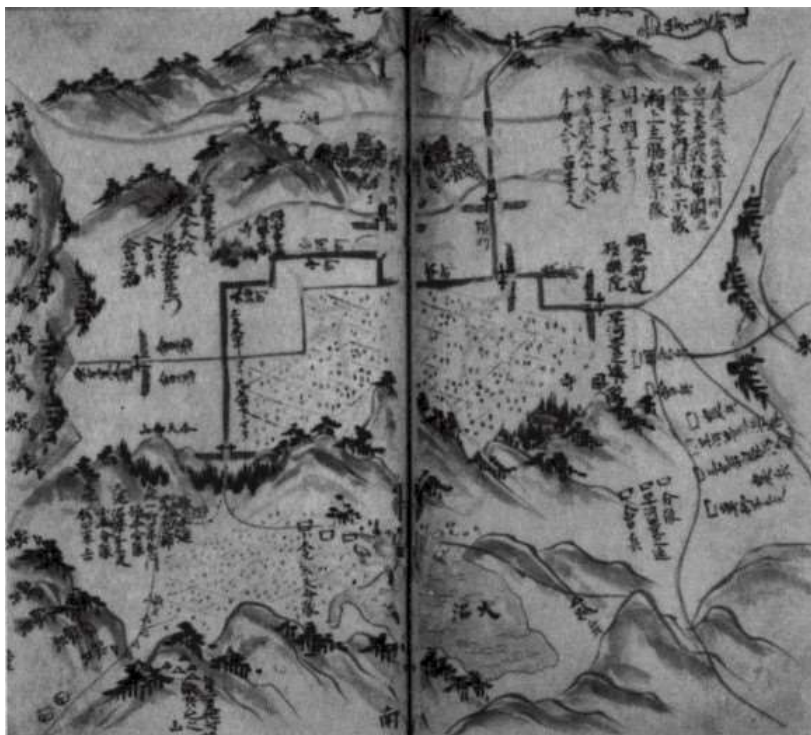


町の通りが幅広く誇張され、折り曲げられて方角の表現も正確でない。  
3方面の戦いをミニチュア画的に描いて説明しようとした図らしい。  
右下部分に描かれたのが、棚倉口の桜町関門。  
中央下部分が、奥州街道正面である白坂口の稻荷山関門。  
左上の小丘陵が描かれた部分が、原方口の立石山堡壘。  
  
紙面のカコミ記事は慰霊碑文の写しのようなものである。  
紙面の左辺には那須岳に連なる山々も描き込まれている。

\*白河町大戦争図（岡部文三氏蔵）



\*5月1日、白河口の図



激しい銃撃戦を描いている。兵士が密集して腹背に敵を受けている。弓や槍が混在しているところや、日章旗を掲げていることから、白河市街に追い詰められた東軍の姿と思われる。紙面右上で物陰に身を隠すようにした兵士は、散兵戦術で次第に包囲を詰めてくる西軍であろうか。兵士に混ざって、蓑笠姿の農民がいる。人足や従者として徴発されたまま戦闘に巻き込まれたのだろうか。

「佐藤宮内」「瀬上主膳」「味方討死六十人余」とあるので、仙台藩関係者による作画と思われる。1か所「賊兵」という表記があるが、これは、棚倉口から雷神山攻撃をした西軍部隊を指している。奇襲を受けた悔しさが表れているのだろうか。

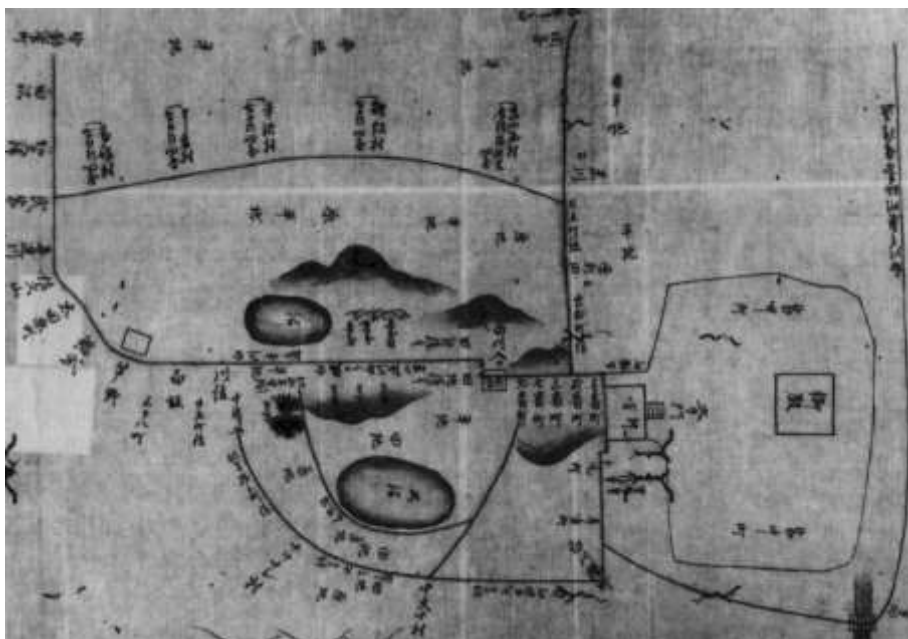
\*5月1日、白河口の図（長岡市立互尊文庫蔵）



稲荷山（東軍）と小丸山（西軍）に陣取って砲撃を交わす両軍の様子を描いている。広がる平地は、南湖まで続く大沼田である。遠景に「白河城」「白河町」とあるが、間に稲荷山～三本松山～雷神山があるので、この位置からは望めないはず。

互尊文庫：大正7年に新潟県長岡市で最初の公立図書館として開館した。名称は、創設者・野本恭八郎の唱えた互尊独尊思想にちなむ。

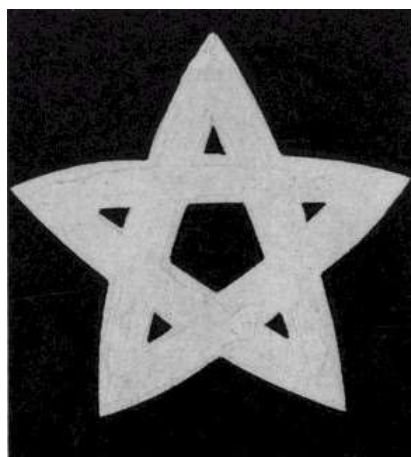
\*戊辰白河方面図



宇都宮－大田原－芦野－白河城までの地理概要がまとめられた地図。

戦闘については何も記述がないが、誰が使用した地図だろうか。

\*奥羽列藩同盟軍 紋章



この紋章の由来は何であろうか。

五稜星（ごりょうせい）は北辰（北極星）のシンボルという。後年、北海道開拓使は五稜星をデザインした旗を使用した。

陰陽道では魔除けの呪符として五芒星（ごぼうせい）を用いたが、陰陽五行説を表すという。

五芒星は、大日本帝国陸軍の礼服にも一部使用されていたという。

\*会津藩主松平容保 (写真)

美濃高須より、会津藩主松平容敬の養子となる。文久2年より、尊王攘夷運動の激化する京都の守護職となり、公武合体政策に尽す。孝明天皇の信頼厚い。



面長でいわゆる殿様顔？

松平容保は京都守護職を勤め、尊王の念が篤く、孝明天皇の信任が厚かったという。

それが「朝敵」とされたことは、いかにも不本意であったろう。

高須藩：現在の岐阜県海津（かいづ）市。

高須松平氏は尾張徳川家の流れで、容保の実父は第10代高須藩主松平義建（よしたつ）。

容保は11歳で会津藩主松平容敬の養子となった。

\*西郷頼母 (写真)

閏4月26日白河城に入り、5月1日合戦で東軍を指揮した。



京都守護職を辞退するよう諫言し、戊辰役に際しても恭順を進言した家老が、役目柄とはいえ白河口の会津軍総督とは皮肉な成り行きである。

会津藩松平家の家老を代々務める家柄という。

容保の意向とは合わない場面が多かったようであり、軍事的な能力が優れていたとも思われないが、会津藩の人事はこのようになるしかなかった？

頼母の母・妻・娘らは、会津若松城籠城に際して足手まといになることを避けるために、親戚とともに集団自害している。

頼母と長男吉十郎は、後に会津若松城から脱出して箱館まで戦い、晩年は神社神職など勤める。明治36年歿。

## \*横山主税（写真）

会津藩若年寄。白河口防衛の副総督として出陣、戦死。



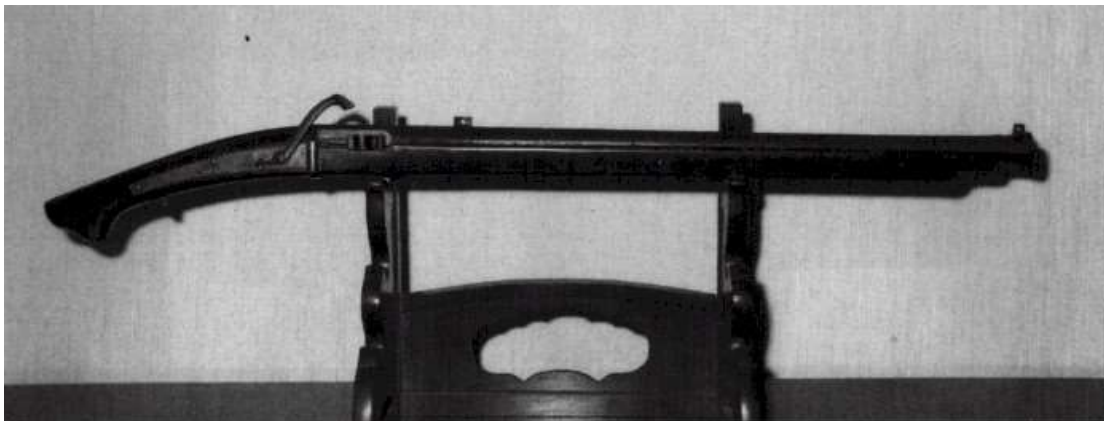
1866年パリ万国博開催時に徳川昭武に随行し渡欧、あわせて欧米先進諸国の視察を経験した（20歳）。

将来を期待された人材だが、5月1日の白河口稲荷山の戦いを指揮中、被弾して死亡した（22歳）。

⇒【会津藩横山主税・海老名衛門・一柳四郎左衛門、討死】

## \*火縄銃・三刃玉馬上筒さんもんめだまばしやうづつ（白河市個人蔵）

馬上で使用することからこの名がある。命中度は低いが、いかく威嚇用になった。

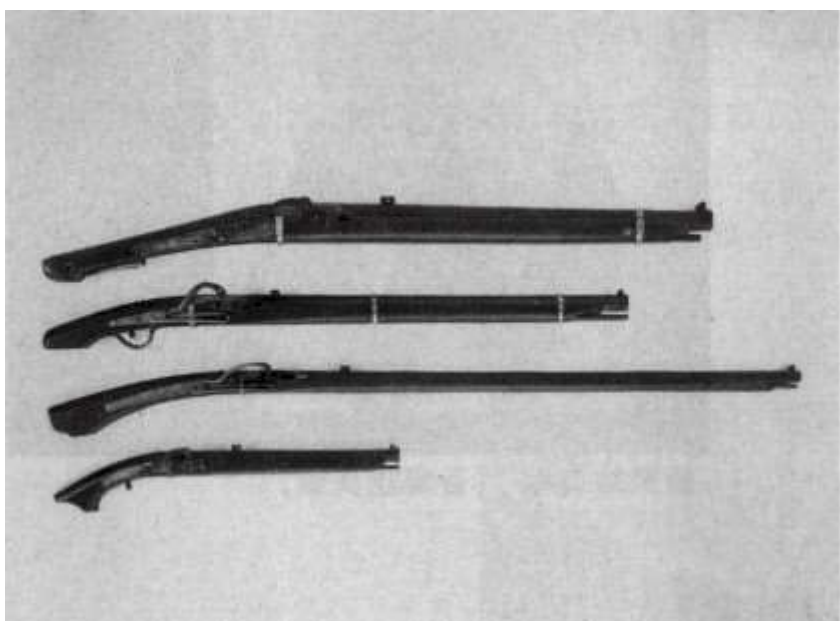


3刃玉なので、火縄銃としては小型。馬上用だからだろう。

3刃は約11g。パチンコ玉2つ分くらい。

## \*火縄銃各種

戊辰戦争は銃火器の戦いであった。東軍は洋式銃が不足のため、火縄銃を大量に使用した。



火縄銃は、鉛弾の重量により区分され、兵卒用は6～10刃（約23～38g）の中筒であった。戦国時代終了から200年余り、機構上での改良や進歩はほとんどなかった。

火縄銃は雨天での使用が困難であるが、白河口の戦いの頃は梅雨期であり、5月1日の戦いも雨天であったという。

東軍も後には新式銃を購入していくようになる。しかし白河口の戦いの時期は東軍にとってほぼ初戦であり、戦術・兵装ともに未熟であった。



\*会津藩の木砲



巻きつけてあるのは竹を編んだ箍  
〈たが〉である。  
こんなものも実際に使用されたの  
だろうか。  
威嚇〈いかく〉用の花火に近い？

\*新選組肩章（谷春雄氏蔵）



東軍・西軍とも、同士討ちを防ぐた  
めに合印〈あいじるし〉の肩章を付  
けることが行なわれた。

『武器と防具幕末編』（幕末軍事史  
研究会著・新紀元社）

谷春雄：新選組に造詣が深かった東  
京都日野市の郷土史家。新選組等  
に関連する著述多数。2006年逝去。

\*会津藩ラッパ



会津軍がラッパを持っているのが  
興味深い。  
西洋式軍備を学ぶ過程で入手した  
のだろうか。  
東軍が近代的軍隊として統制され  
ていたとは考えにくく、とにかく味  
方を鼓舞するために吹き鳴らした  
のだろうか。

\* 齋藤一<sup>さいとうはじめ</sup>の愛用した羽織<sup>あかましずこ</sup> (赤間倭子氏蔵)

白河口の戦いの会藩の戦列には、旧幕兵や、壊滅した新選組の残党も混ざっていた。彼等はこの後も、会兵とともに母成峠<sup>ぼなり</sup>ほか各地に転戦した。

白河口での新選組は、負傷して若松に残っていた土方歳三に代わって、齋藤一（変名して山口次郎）が指揮し、激闘した。



齋藤一：新選組三番隊組長。後に警視隊として西南戦争で戦う。1915年歿。

赤間倭子：歴史小説作家、ノンフィクション作家。会津会会員。「齋藤一の会」主宰。

\* 烏組<sup>からすぐみ</sup>の隊旗

仙台藩に所属する別動隊。白河口で果敢に活躍した。



烏組〈からすぐみ〉は、仙台藩士細谷十太夫が組織した博徒・農民からなる衝撃隊〈しょうげきたい〉のあだ名である。

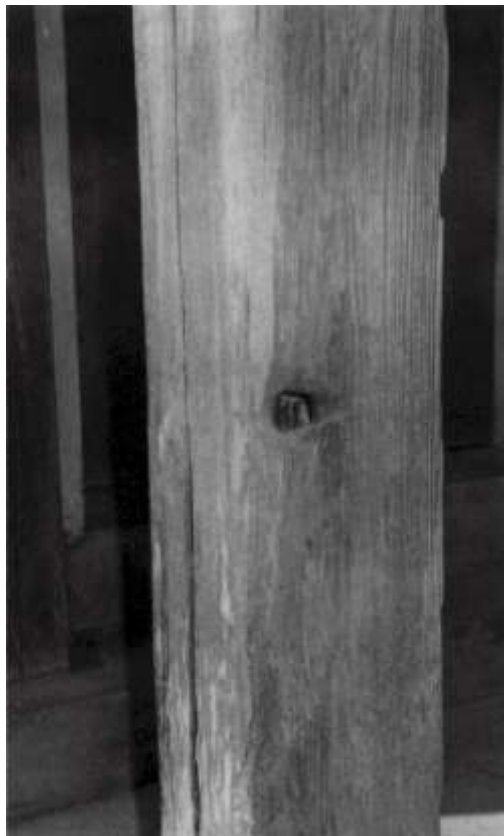
黒い服装で、ゲリラ戦を展開したという。

西軍正規兵に対しては最も効果的な戦術であったか？

⇒ 【仙台藩烏組と棚倉藩十六人組】

⇒ 【5月21日の戦い\_七曲からすぐ組】

いづみざきむらおおたがわ じょうがんじ  
\* 泉崎村太田川の常願寺に残る弾痕



常願寺〈じょうがんじ〉：福島県西白河郡泉崎村太田川〈おおたがわ〉にある。

被弾時は薬師堂の柱だったそうだが、現在は転用して、境内の中世板碑〈いたび〉の屋根覆いの柱になっている。

かんせんじ くり どうしやうこん  
\* 西軍が宿営した関川寺の庫裏柱に残る刀傷痕



関川寺〈かんせんじ〉：白河市愛宕町〈あたごまち〉にある。

庫裏〈くり〉：寺院の施設のうち僧侶の居住部分や台所のこと。

⇒【小池理八供養碑\_関川寺】

\*板垣退助<sup>たいすけ</sup>（写真）

会津攻撃の西軍将群像の前列中央。参謀板垣は、5月29日、土佐藩兵を率いて白河に入城。6月24日、白河を出撃して<sup>たなぐら</sup>棚倉城<sup>おと</sup>を陥した。



\*（右より）岩倉具定<sup>ともさだ</sup>・具視<sup>ともみ</sup>・具経<sup>ともつね</sup>（写真）

具定は西軍白河口総督。弟の具経は、同副総督。



土佐藩迅衝隊〈じんしょうたい〉の面々。総前列中央の板垣退助の右肩後で襟巻をしているのが谷干城〈たてき〉。板垣隣の少年は干城の養子で谷乙猪〈おとい〉。最年少隊士で白河口戦争当時10歳。

⇒【5月29日土州板垣軍が白河に入る】

岩倉具視は、議定になって徳川追討を主張し、鳥羽伏見の戦いに成功すると新政府の実権を握り、白河口戦争の時点では海陸軍事務と会計事務を担当する最重要閣僚であった。息子2人は、東征に当たり東山道先鋒総督・副総督となり、のち奥羽征討に当たり奥羽征討白河口総督・副総督となった。

\*<sup>せいらしゅうぞう</sup>世良修蔵（写真）

長州藩士。<sup>おううちんがそうとくふかさんぼう</sup>奥羽鎮撫総督府下参謀。閏4月9日より18日まで白河に駐在した。



世良修蔵〈しゅうぞう〉砥徳〈きよのり〉:

大島郡棕野村 中司八郎衛門の三男（のちに世良姓を名乗る）。僧月性の時習館に学び、江戸では儒者安井息軒の三計塾塾長をつとめる。高杉晋作の奇兵隊書記、第二奇兵隊軍監を経て、戊辰戦争で奥羽鎮撫総督下参謀。これらの経歴は「勉学努力」の人である。

⇒【世良参謀、暗殺される】

\*<sup>すみよし</sup>川村純義（写真）

薩藩四番隊長。白河口で閏4月25日に敗退。5月1日には東翼隊を指揮。



川村与十郎〈よじゅうろう〉純義〈すみよし〉:

家格は御小姓組で最下級の藩士であった。西郷隆盛に実弟のように可愛がられたという。

長崎海軍伝習所一期生。

のち海軍中将、参議、海軍卿、枢密顧問官。明治政府の海軍整備に尽力も、政治の世界とは一線を画した。死後海軍大将に昇進。

⇒【大平八郎、間道案内を託される】

\*<sup>いわお</sup>大山巖（写真）

白河口での薩藩二番砲隊長として、<sup>いなりやま</sup>稻荷山の東軍陣を撃つ。



大山弥助〈やすけ〉巖〈いわお〉:

寺田屋事件に連座、のち江川英龍の塾で砲術を学ぶ。

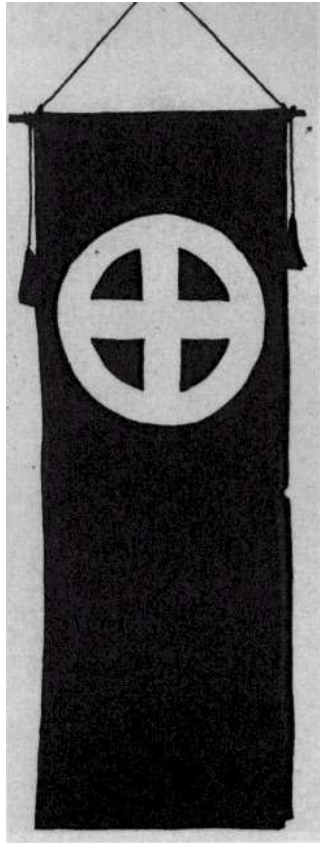
戊辰戦争、西南戦争、日清日露戦争に従軍。

のち元帥陸軍大将、陸軍大臣、内大臣、元老など。

妻は会津藩の山川捨松。栃木県那須に別荘・農場を持った。

⇒【大山巖・野津道貫宿泊のこと\_登町大島・天神町菱屋】

\*薩藩大山巖砲隊旗



\*西軍将の菊紋入り陣羽織じんぼおり (高橋一美氏蔵)



変わった菊紋である。

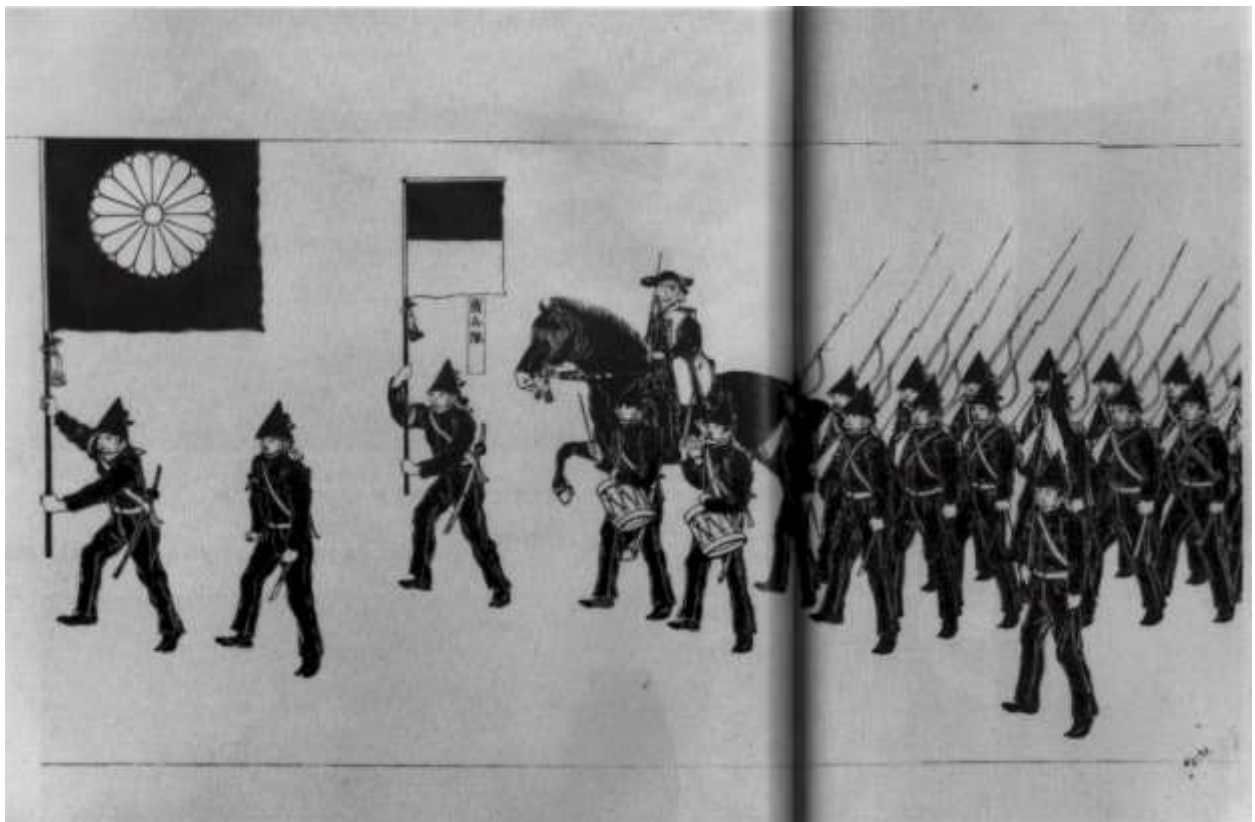
\*西軍隊長の赤熊（しゃぐま）



熊毛には黒・白・赤の色分けがあった。  
黒熊〈こぐま〉、白熊〈はぐま〉、赤熊〈しゃぐま〉。  
毛は、ヤクの毛・馬毛・人毛などを使用。  
江戸無血開城の際の接収物品を使用したという話がある。

このような毛の被り物を使用した由来は何だろう？  
戦国時代の甲冑の飾りに「毛」を使った例があり、祭礼などで神霊の象徴としても使うようだ。

\*<sup>きんき</sup>錦旗を先頭に進む西軍図



薩摩藩の軍装。  
黒い立て襟のフロックコートとズボン。  
「半首〈はっぶり〉」という革製円錐形の尖笠〈とがりがさ〉。  
足は草鞋〈わらじ〉履き。  
慶応3年に藩士全体に洋式銃を自弁するよう下令があり、エンフィールド銃を調達。  
『武器と防具幕末編』(幕末軍事史研究会著・新紀元社)

⇒【西軍の身支度について\_天神町藤田氏の記録】

\* (上より) ゲベール銃・ゲベール操銃用木銃・エンフィールド銃



ゲベール銃：前装滑腔銃。後の型は雷管式。球形弾。1831年以降輸入。元々が、敵の密集兵団の中に打ち込んで混乱させる目的の銃であるため、命中精度は悪い。日本でも戊辰戦争時には「旧式」と認識されており、第一線部隊ではあまり使われなかったという。

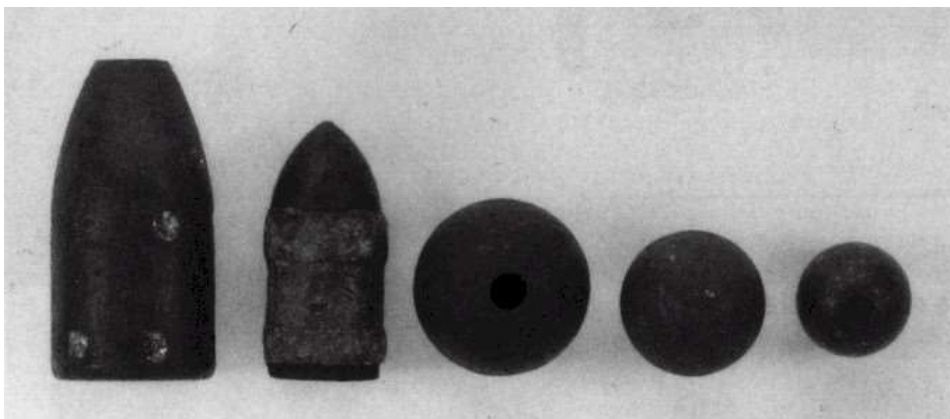
エンフィールド銃：ミニエー銃の一種。前装施条銃。雷管式。底部拡張式の椎実形弾。1861年式が多く使われた。西軍の主力小銃であった。

この後の銃型式は、後装弾薬筒使用のスナイドル銃、後装連発式のスペンサー銃などが続く。

[『武器と防具幕末編』\(幕末軍事史研究会著・新紀元社\)](#)

\* 砲弾各種 (高橋一美氏蔵)

(左より) <sup>よんきんさんぼう</sup>四斤山砲・アームストロング砲・<sup>きゅうほう</sup>臼砲・<sup>たいほうだん</sup>大砲弾。



四斤山砲：青銅製前装式施条砲。榴弾（破裂弾）重量 4k g。最大射程 2600m。

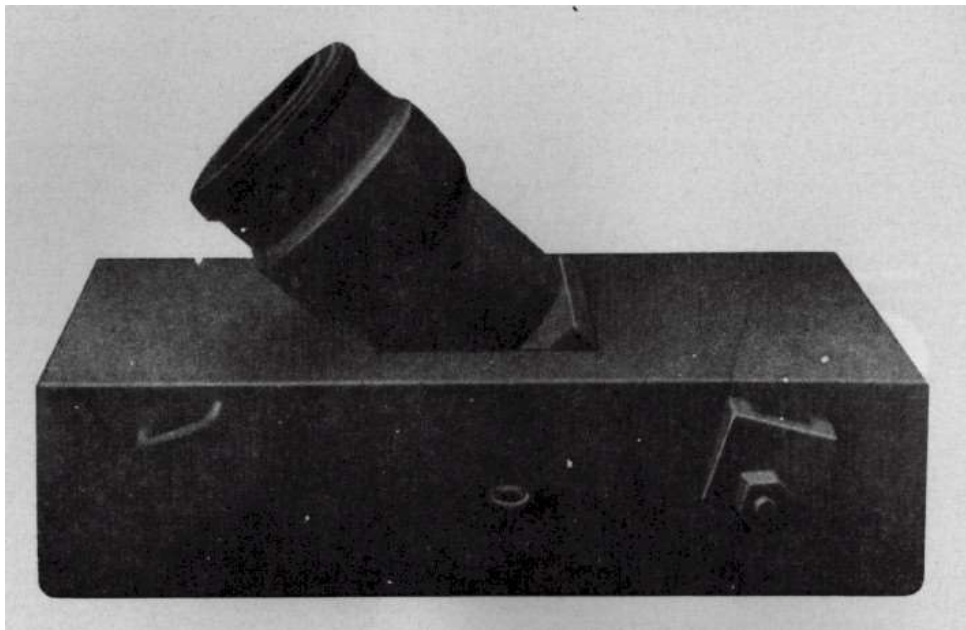
アームストロング砲：後装施条砲。6 ポンド野戦砲は、口径約 6.4cm。最大射程 3600 m。使用例は佐賀藩の 2 門。(6 ポンドは約 2.7k g)

[『武器と防具幕末編』\(幕末軍事史研究会著・新紀元社\)](#)



きゅうほう  
\* 臼砲

砲身短く、仰角 45 度に一定。鉄焼玉を撃ち込む。

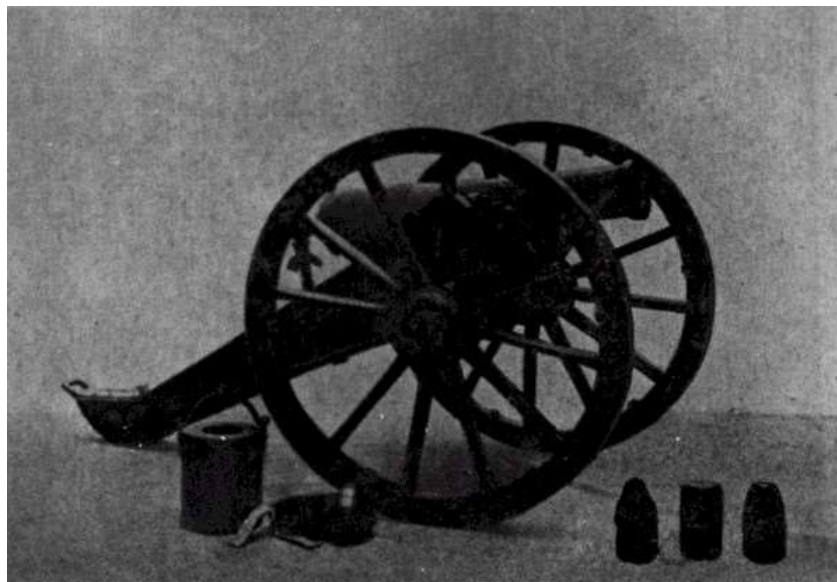


臼砲：12 ドイム ハンドモルチールと呼ばれる野戦携帯用である。台座に革バンドを取り付け、竿に下げて 2 人で担いだ。榴弾や焼玉を使用。口径約 12c m。最大射程 763m。

[『武器と防具幕末編』\(幕末軍事史研究会著・新紀元社\)](#)

よんきんさんぽう  
\* 四斤山砲

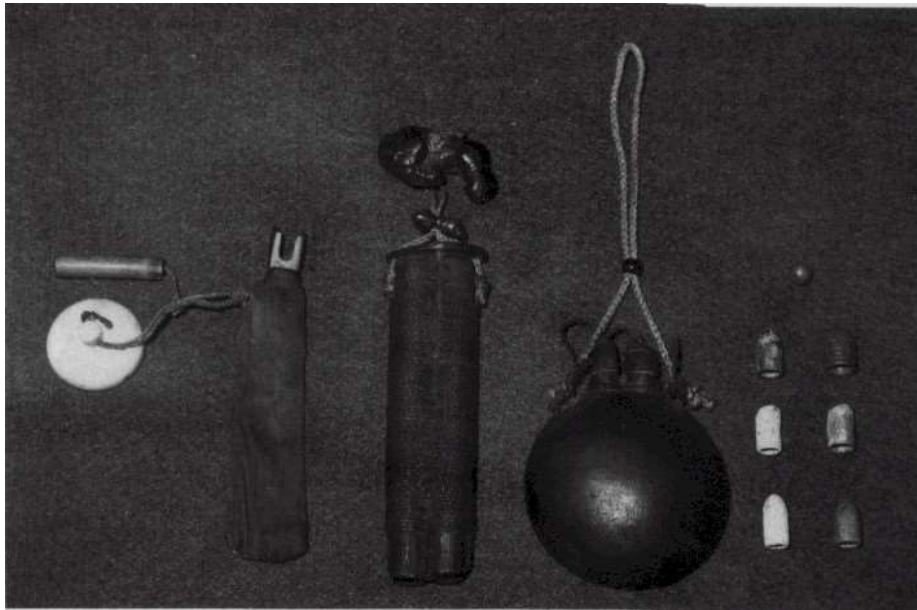
戊辰戦争中、各藩が最も多く所有し、使用した。



四斤山砲：青銅製前装式施条砲。榴弾（破裂弾）重量 4k g。最大射程 2600m。

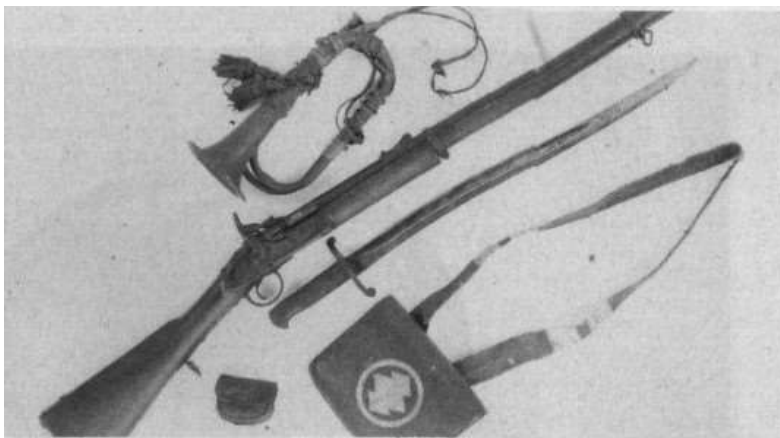
[『武器と防具幕末編』\(幕末軍事史研究会著・新紀元社\)](#)

\* (右より) 鉛玉・火薬入れ (丸型・筒型)・鳥口弾丸入れ (白河市個人蔵)



右側に並ぶ椎実形の弾は、エンフィールド銃用らしい。  
弾薬包方式によったと思われるのだが、この遺品からはうかがい知れない。

\* 西軍使用品 (高橋一美氏蔵)



ラッパ以外は銃に関連する装備である。  
この銃は、「2つバンド」と呼ばれたエンフィールド銃 (前装施条銃) らしい。

剣はこのエンフィールド銃に取り付ける銃剣である。英国式ヤタガン形銃剣らしい。  
「ヤタガン形」とはオスマン帝国の歩兵携帯用小刀に由来し、刀身が緩やかなS字形を描いているもので、19世紀に各国軍隊の銃剣として用いられた。

肩帯の付いたバッグは、「胴乱 (どうらん)」と呼ばれた、兵士が弾薬を携行するためのものである。火薬と弾が組み合わされた弾薬包を40~50発収納した。

小型ポシェットは、雷管盒 (らいかんごう) である。雷管を携行するための容器で、内側に毛皮が張られていてクッションになっていた。  
エンフィールド銃などの雷管を用いた外火式小銃は、弾薬包の他に雷管を携行する必要があった。

エンフィールド銃用の雷管は、真鍮や銅で出来た小さな皿のような形をしていて、中には衝撃に敏感な起爆薬を数ミリグラム詰めている。撃鉄が雷管を打ち、雷管から出た火炎が弾薬包の火薬に点火し、弾が発射される。

施条銃で「狙撃できる銃」が実現したことにより、散兵戦術が可能になった。

\*慶応戊辰官軍戦死肖像掛軸 <sup>かおう</sup> 荷翁画 <sup>もとまちちようじゆいん</sup> (本町長寿院蔵)

所蔵している長寿院は、西軍の野戦病院にあてられ、西軍戦死者多数の墓がある。



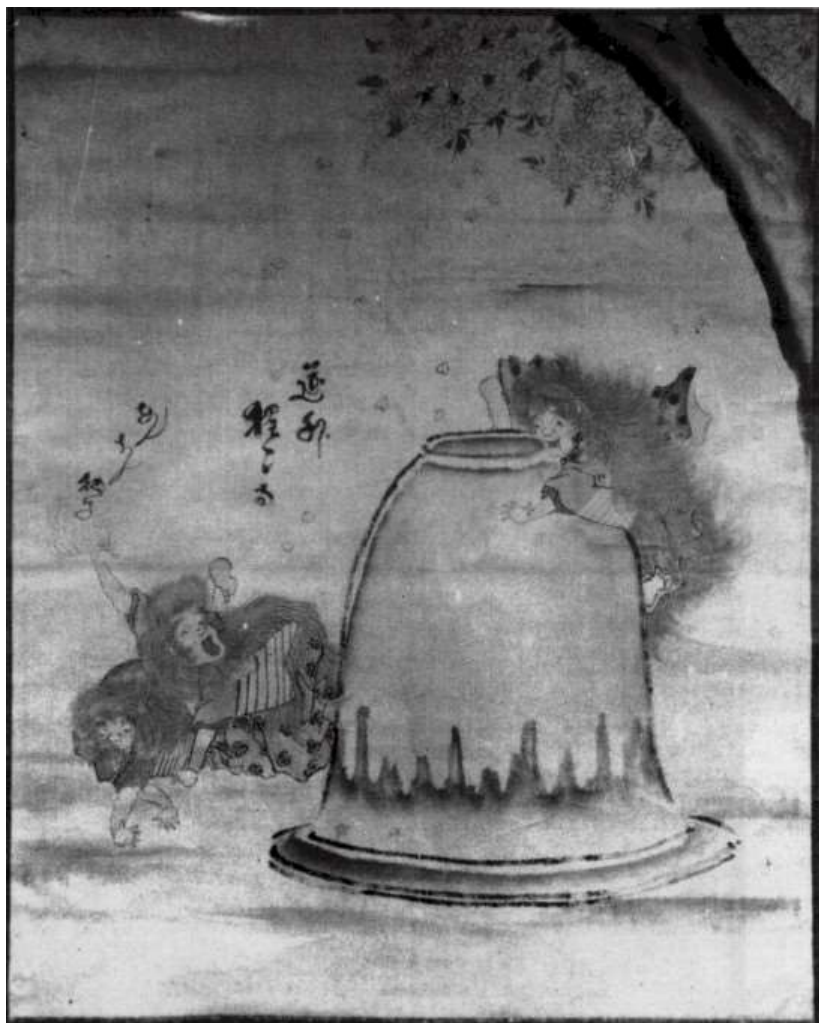
戦死者を偲ぶ「肖像画」なのだが、みな丸顔で、水墨画中の幽境に遊ぶ童子を連想させる。

闘争に斃(たお)れた人々の靈魂が安らかであれという願いであろうか。

荷翁(かおう): 白河町の絵師、鶺鴒沼舒嘯(うぬまじょしゅう)。

⇒【長寿院西軍の墓\_本町長寿院】

\*薩藩が宿舎とした家に贈った陣羽織の裏地（白河市個人蔵）



この陣羽織の裏地は、猩猩〈しょうじょう〉が描かれている。  
猩猩は酒を好むとされる架空の動物・精霊であるが、能楽・民芸では人の徳を褒め、祝福を与える。

\*薩州四番隊附<sup>きんこくかた</sup>金穀方の軍用箱（白河市個人蔵）



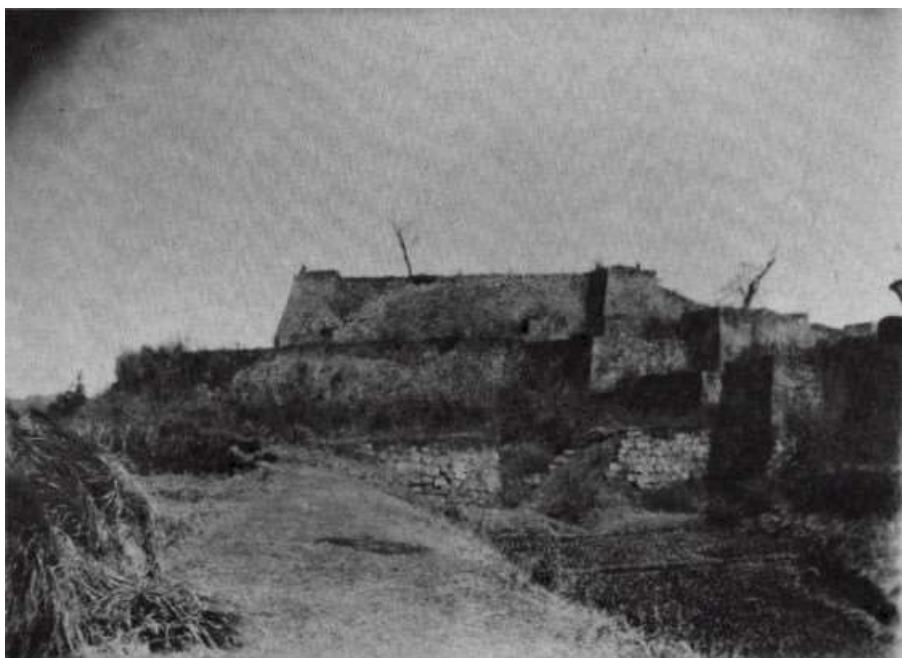
何を入れ、運んだのだろうか。  
金穀方は金品を調達して戦闘部隊を支援した。軍の事務方である。

復刻版ではおおよそ戦争の時系列で掲載したようだが、なお混在が見られたので並べ直した。

＊白河城（小峰城）明治初期（白河市阿部恒三氏蔵）（写真）

小峰城とも称する。中世白河領主結城氏の分流小峰家の城館であった。白河が会津領時代には、城代が居城。初代の白河藩主丹羽長重が、寛永9年（1632）大修築し完成。丹羽家以後、5家を経て、幕末の城主は阿部家であった。阿部正外は、老中として幕閣にあったが、兵庫開港問題で罷免され、次の正静は棚倉へ所替えを命ぜられ、慶応3年移動した。このため白河城は明（空）城として、慶応4年・戊辰の年を迎えた。

藩を失った白河城は、幕領となり、ついで新政府に没収され、その指令によって二本松藩兵らが駐屯していた。閏4月20日、ここを会津の防衛反攻の前線基地としようとした会津軍が白河城を襲撃した。場内の守備兵には戦意なく、城に火を放ち棄てた。そして、その後成立した奥羽列藩同盟の藩兵が、この城に派遣されてきた。



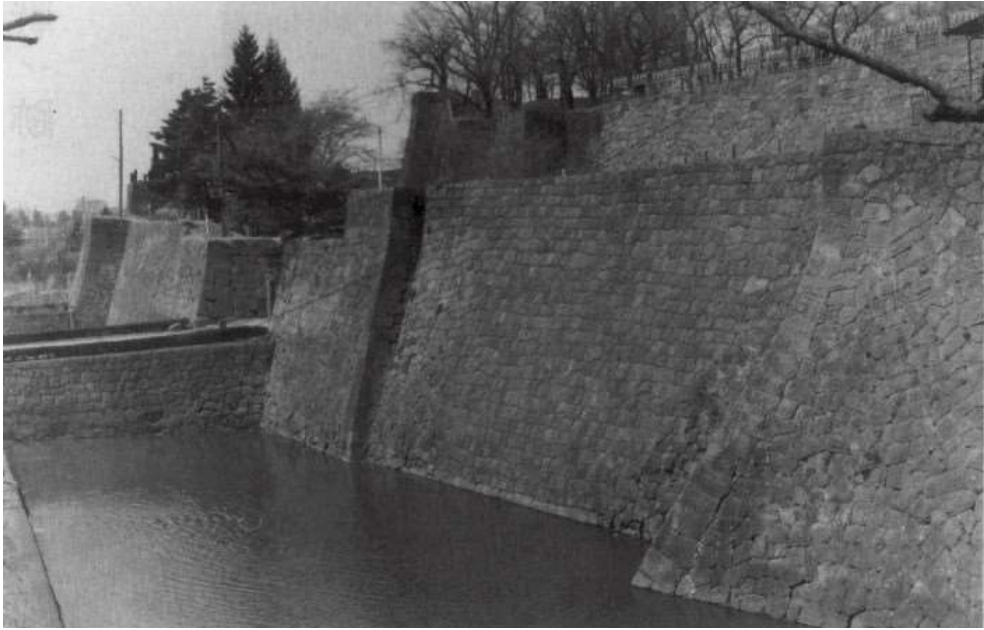
戊辰戦争で焼失して廃墟となった白河城（小峰城）の姿と思われる。白河城は東北地方では珍しい総石垣造りの城なのだが、このように建物も樹木も無くなってしまうと、かえって寒々しい。この写真は、二の丸元太鼓門の外（現在「白河集古苑」があるあたり）から本丸石垣を撮影している。手前の堀が田んぼのように見える？ので、写真撮影の時期は戊辰戦争から数年後なのかもしれない。すると白河城はしばらくは廃墟然とした姿を曝したのだろうか。

明治9年（1876）に行なわれた明治天皇の奥州巡幸では、小峰城跡で「天覧産馬」が催されている。その後、城址公園として桜などが植樹され、二の丸跡に野球場、帯曲輪跡にバラ園が設けられていく。さらには1991年に三重櫓が木造復元建築されたが、その際使用された木材に戊辰戦争激戦地となった稻荷山の杉をっており、そのため部分に弾痕がある。

白河城（小峰城）図 [いずれの図も白河市の資料による](#)

⇒【会津藩兵、白河城を奪取】

\*白河城（写真）



この写真は、復刻版編集の頃の写真と思われる。(1988年ころ)  
本丸正面の清水門跡を掘越しに東側から見たところである。

\*白河城（写真）



この写真は、復刻版編集の頃の写真と思われる。(1988年ころ)  
清水門を入ってすぐ左、桜之門への上り口である。  
この桜之門への石段は、往時は築地に隠され半ば隠し門の構造になっており、清水門を突破して本丸中心部をめざす敵を背後から攻撃するために配置されたようである。

白河城（小峰城）図  
いずれの図も白河市の資料による

\*奥州街道<sup>さかい</sup>境の明神



復刻版で「塙」とあるのは誤植と思われる。  
陸奥と下野の国境の守り神。衣通姫（玉津島明神）と中筒男命（住吉明神）の2社が並ぶ。

\*領界標石

下野と奥州の国境（栃木と福島<sup>の</sup>県境）。白河城を占拠した会津兵は、この標石を倒し、  
「<sup>これよりきた</sup>従是北会津領」の木標を打ち立てたという。



奥州街道白坂宿（白坂泉岡）の南約1.4 kmに下野・陸奥の国境があり、「境の明神」が祀られている。下野の社と陸奥の社が隣り合っている。

明神社の向い側、街道端に領界標石「従是北（これよりきた）白川領」が立っている。

ここは国境でもあるのだが、領主の認識は領界であり、倒したり立てたりするのは領界標なのである。

（参考図）

[白河口戦争の地名地図](#)

⇒【国境標柱のこと】

## \*5月1日会津東軍防衛ライン丘陵の望遠

白河城下南部に西から東に連なる丘陵。左から風神山、稲荷山、薬師山、三本松山、  
焔硝蔵山と続く。この風神山の左手に立石山の孤丘があり、右方の三本松山の背後に  
雷神山がある。

東軍は稲荷山に主力軍を配置し、立石山、雷神山にも布陣した。5月1日の激戦は、この丘陵地帯で展開された。この日西軍は、奥州街道口のこまるやま小丸山から正面の稲荷山を攻撃するとともに左右からも攻撃した。即ち一方は、西の原方街道から進み、東軍の拠点立石山を攻撃、これを落とし、風神山を占領。一方は東の雷神山を落とし、薬師山を占領。稲荷山を左右から挟撃した。このため東軍はこの日、戊辰東北戦争で最大の被害を受けることになる。



白河城下の南には、このように比高 50mほどの丘が連なる。ここが東軍の頼みの防衛線であった。しかし西軍は、この丘陵を迂回して左右側面から攻撃する部隊を派出、東軍の陣地を切り崩した。

『戊辰役戦史』によると、西軍は閏4月25日の第1次攻撃の失敗を反省し、事前に地形・敵状の偵察を行ない、そのような包囲攻撃を企図したという。

(参考図) [南から稲荷山・白河方面を望む](#)

[白坂からの白河包囲攻撃路を望む](#)

[5月1日西軍の白河包囲攻撃図](#)

[戊辰白河地図インデックス](#)

## \*こまるやま小丸山方面よりみたいなりやま稲荷山の遠望

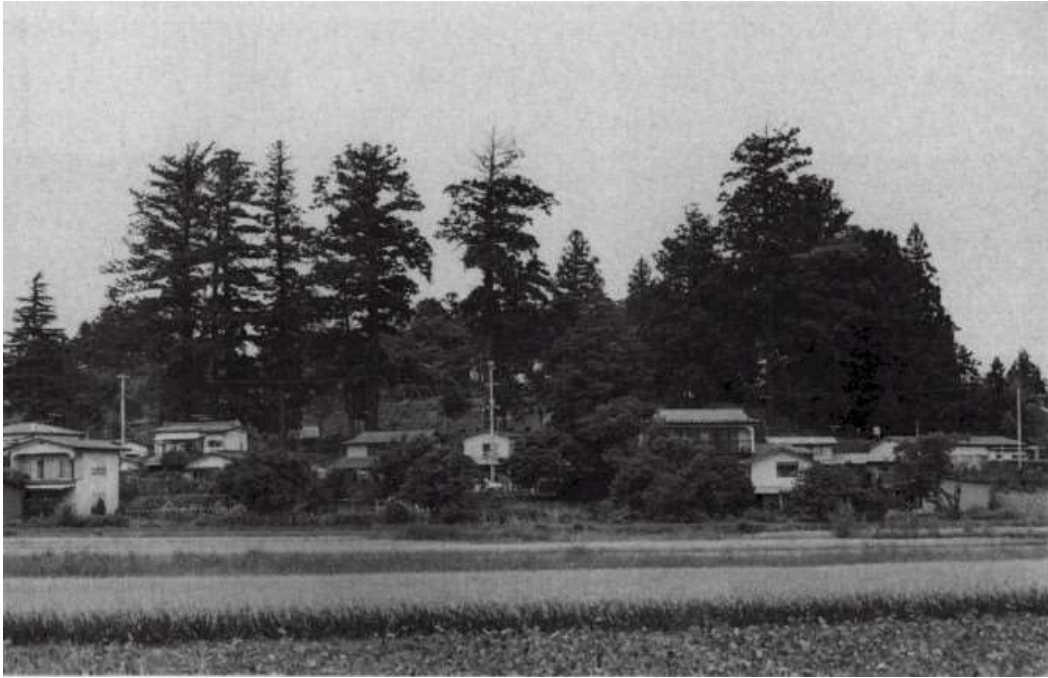
5月1日、西軍攻撃の正面口。小丸山より西軍が、稲荷山防塁の東軍を砲撃。東軍壊滅。会津藩副総督横山主税ら戦死。





## \*稲荷山

左方のモミの木の下に、会津藩戦死の墓。その向いに長州・大垣戦死6名の墓がある。



西軍は奥州街道正面を主攻と見せかけた。砲兵隊を集め、また偽隊旗を並べることで、東軍を稲荷山陣地に牽制した。

しかし単なる“おとり”ではなく、20ドイム臼砲をはじめとする強力な砲火を東軍陣地に浴びせた。これらの写真に見るように、丘列の前面には泥田が広がっており、歩兵がまともに進撃することは困難だった。

(参考図) [南から稲荷山・白河方面を望む](#) [戊辰白河地図インデックス](#)

## \*立石山<sup>たていしやま</sup>

5月1日、東軍西翼の防塁となり、激闘。



この写真は、立石山を南方から望んだものと思われる（左側に新幹線高架が見える）。西方へ迂回した西軍左翼隊は、この写真の左方から立石山を攻めた。

(参考図) [西から立石山陣地を抜いて白河市街へ](#)

らいじんやま  
\* 雷神山

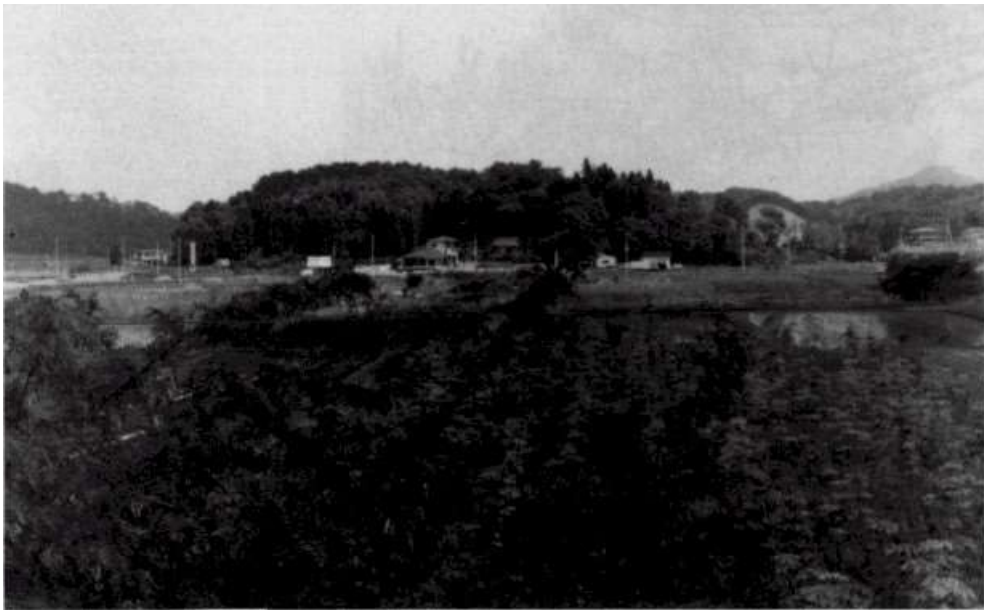
5月1日合戦において東翼の戦闘があった。



復刻版で「雷電山」となっていたので「雷神山」と修正する。  
この写真は、焰硝蔵山かも知れないが？ だとしても、この向こうに雷神山が重なっている。手前は大沼の田んぼ。  
(参考図) [南東から雷神山陣地を抜いて白河市街へ](#)

こまるやま  
\* 小丸山を望む

5月1日の戦いで西軍は、この付近に布陣。800メートル先のいなりやま稲荷山に布陣する東軍を攻撃。大山やすけ弥助（いわお巖）は、小丸山から砲兵を指揮したという。



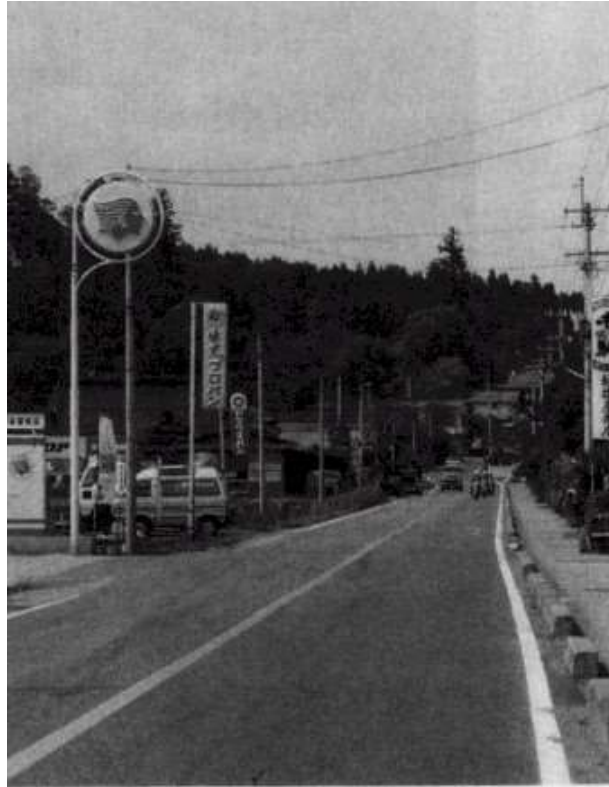
こうして向かい合った丘列と丘列の間は泥田が広がっていた。  
小丸山の右遠方に栃木県の釈迦ヶ岳（高原山）が見える。

(参考図) [稲荷山から南（小丸山・白坂）を望む](#)

【清子書込】 自宅望遠 （とあるが、この写真では自宅は山陰では？）

しらさか  
\*白坂宿と奥州街道

西軍の進撃ルート。5月1日合戦には、西軍は白坂より3軍に分かれて進攻した。5月26日にも戦闘あり。丘陵左寄りの大杉群の下方にある観音寺の墓地には、白坂で戦死した大垣・長州藩兵や、後日、旧会藩士に暗殺された大平八郎おおひらはちろうの墓あり。



【清子書込】白坂本宿、越後屋

写真にも「越後屋商店」看板あり。

⇒【白坂村観音寺の墓\_白坂観音寺】

はらかた かみしんでん  
\*原方街道上新田部落

5月1日、白坂しらさかから立石山たていしやま方面へ進む西軍ルート。



地図で見ると、西軍左翼隊はかなりの道程を迂回しているのが分かる。戊辰戦争の当時、原方街道の道幅はこんなに広くなかっただろう。地元民の案内が無ければ行軍は困難だったのである。 ⇒【内山忠之右衛門の道案内】

(参考図) [白坂からの白河包囲攻撃路を望む](#)

\*白河市街より西軍（占領軍）防衛ライン丘陵の遠望

5月1日、白河城は西軍に占領された。以後、城北方に連なるこの<sup>きんしょうじやま</sup>金勝寺山・<sup>ろくたんやま</sup>六反山・<sup>ふじみやま</sup>富士見山の丘陵群は、城奪還のために反攻する東軍と、それを防衛する西軍の、攻防の焦点となった。特に6月12日の**第4次**白河攻撃の攻防は激戦だった。この日六反山では福島藩兵が14名、仙台藩兵がこの方面で54名戦死するなど東軍は大きな損害を受けた。西軍は、さらにこの丘陵を越えて出撃した。 [写真拡大](#)

「第2次」ではなく「第4次」



(参考図) [白河城から北西（金勝寺山）を望む](#) [白河城から東（富士見山）を望む](#)

\*<sup>きんしょうじやま</sup>金勝寺山より白河市街の遠望 [写真拡大](#)



(参考図) [長坂北の山中から白河市街を望む](#) [6月12日東軍の白河攻撃（第4次）](#)

\*奥州街道<sup>ねだ</sup>根田宿

東軍反攻の主干道にあり、焼かれた。



⇒ [【6月1日の戦い\\_七曲】](#) (参考図) [白河北方からの攻撃に備える](#)

ななまがり いずみだ こたがわ  
\*七曲 (泉田と小田川の間) 現在廃道



\*左は、泉田部落の陸羽街道と七曲への分岐点

5月21日の七曲の戦には、仙藩の細谷十太夫率いる衝撃隊（烏組）が初戦をこの地で闘い  
白兵戦で西軍を潰走させた。東軍反攻拠点のひとつ。



陸羽街道（りくうかいどう）：奥州街道の別名。

西軍は5月1日の戦いで白河城を奪取したものの、東軍を追撃・掃蕩するだけの兵力は無く、白河を守備する西軍と周囲の山々に拠る東軍の対峙が続くことになった。

（参考図）[白河口戦争の地名地図](#)

[白河北方からの攻撃に備える](#)      [5月21日白河周辺の小闘](#)

⇒ [【5月21日の戦い\\_七曲からす組】](#)

⇒ [【6月1日の戦い\\_七曲】](#)

からめ  
\* 搦目部落

背後は中世白川城のあった搦目山。手前は阿武隈川原。5月27日には、対岸の鹿島から西軍が砲撃。



(参考図)  
[白河南東方からの攻撃に備える](#)

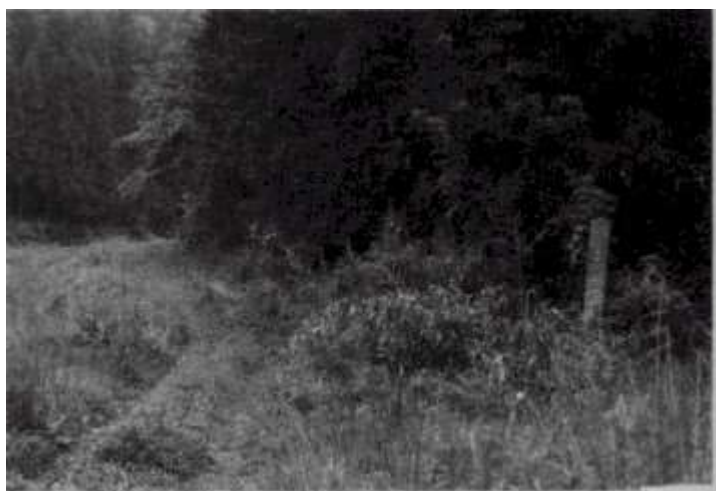
[戊辰白河地図インデックス](#)

[6月12日東軍の白河攻撃\(第4次\)](#)

⇒【5月26日の戦い\_川瀬氏の白河県報告書】

⇒【6月12日の戦い\_搦目の内山糸蔵の談】

からめ  
\* 白河より勢至堂峠を経由する会津街道(白河街道)にある東軍の防塁  
山裾をめぐる旧道と道標が残っている。



白河から見れば「会津街道」、会津から見れば「白河街道」である。  
道標は、六反山(ろくたんやま)北方の大谷地(おおやじ)あたりの山間と思われる。

(参考図) [大谷地北の山中から白河市街を望む](#)

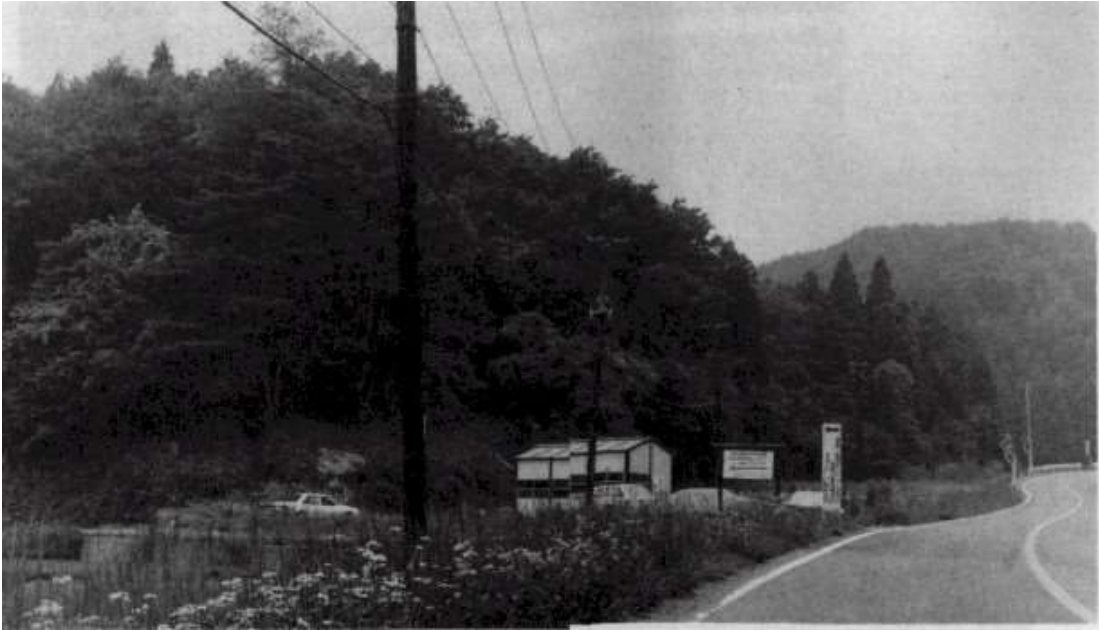
[北方からの東軍の攻撃を退ける](#)

⇒【大谷地の戦争のこと\_草野初吉の談】

⇒【飯土用の戦争のこと\_岩谷平吉の談】



はねいし  
\* 剝石山



白河市豊地〈とよち〉大谷地〈おおやじ〉から北へ広谷地〈ひろやち〉へ向かう途中。写真中の看板はこの左方奥でゴルフ場造成が企てられたころのものらしい。

現在、このあたりは用地造成で地形が大きく変わっている。剝石峠〈はねいしとうげ〉は消滅。「羽根石」という字〈あざ〉あり。

(参考図) [東軍の攻撃を退け、北東方へ駆逐する](#)

\* 会津街道（白河街道）の勢至堂<sup>せいしどう</sup>部落

白河へ進攻する会藩の本陣がおかれた。西郷頼母<sup>さいごうたのも</sup>もここに陣した。（岩瀬郡長沼町<sup>ながぬままち</sup>勢至堂）



勢至堂〈せいしどう〉：現在、須賀川市勢至堂。  
ここからさらに勢至堂峠を越えると、猪苗代湖側の三代である。

三代〈みよ〉：現在、郡山市湖南町三代。

(参考図) [白河口戦争の地名地図](#)

[白河西方からの攻撃に備える](#)

[東軍の攻撃を退け、北西方へ駆逐する](#)

きんしょうじやま  
\*金勝寺山から望む白河城

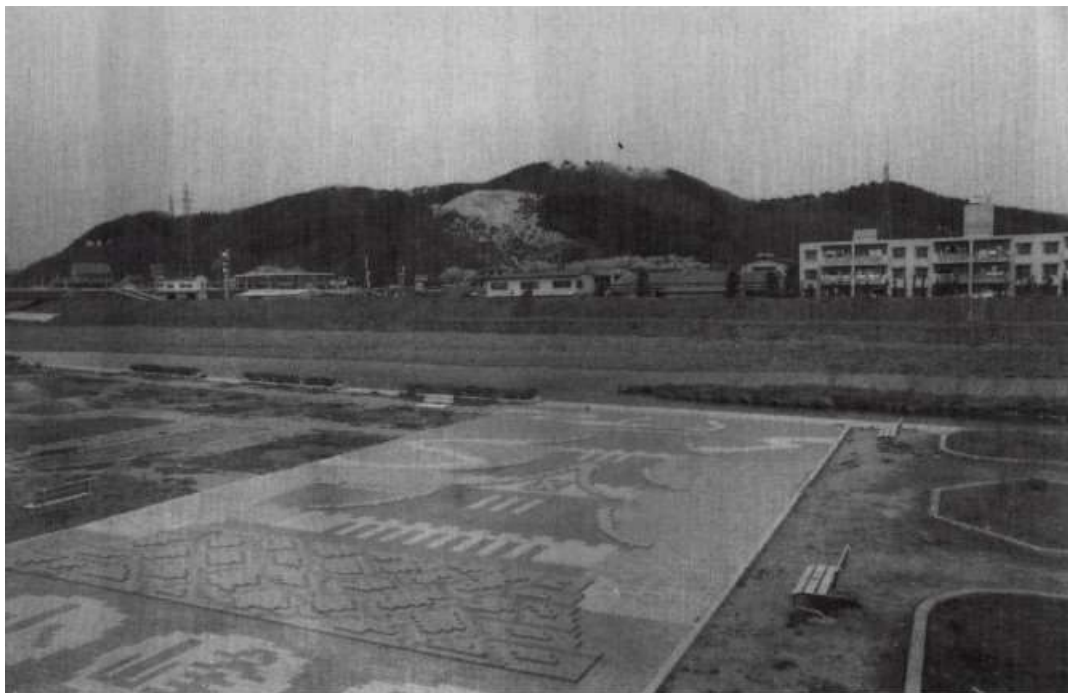
6月12日東軍大逆襲には、会津砲兵が金勝寺山より白河城を攻撃した。



白河城奪回をめざす東軍兵士も望んだであろう眺めである。

(参考図) [長坂北の山中から白河市街を望む](#)

\*金勝寺山 手前は阿武隈川原<sup>あぶくまかわら</sup>



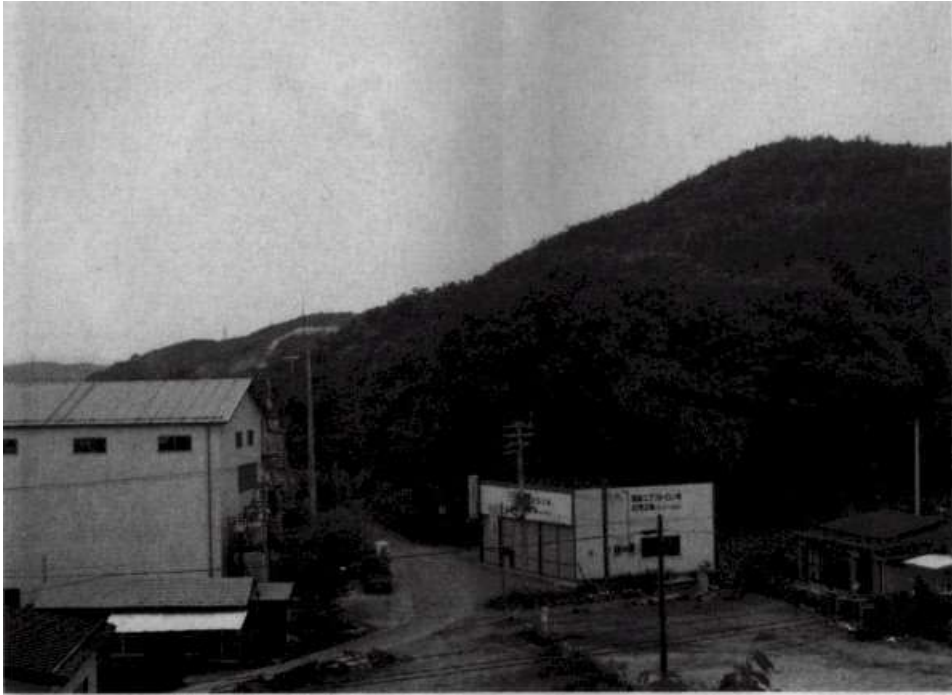
白河城側から阿武隈川を挟んで金勝寺山を望む。  
白河城奪回をめざす東軍は、周囲の山々に進出し、夜は篝火〈かがりび〉を焚いたという。

(参考図) [白河城から北西（金勝寺山）を望む](#)



ろくたんやま  
\*六反山 金勝寺山に続く

6月12日、ここで福島藩兵14人討死。  
うちじに



⇒【6月12日の戦い\_福島藩兵  
六反山で討死】

⇒【福島藩戦死碑\_向寺聯芳寺】

(参考図) [北方からの東軍の攻撃を退ける](#)

[6月12日東軍の白河攻撃\(第4次\)](#)

らかんやま (左) とあぶくまがわ  
\*羅漢山 (左) と阿武隈川

金勝寺山・六反山の丘列で、富士見山丘塊の一部。西軍は富士見山より根田方面の東軍を砲撃。



白河市向寺薄葉のあたりから南東方への眺め。右上にうっすらと関山が見える。

(参考図) [白河北方からの攻撃に備える](#) [東軍の攻撃を退け、北東方へ駆逐する](#)

[6月12日東軍の白河攻撃\(第4次\)](#) [戊辰白河地図インデックス](#)

\*遠景が関山 裾は棚倉街道と郷土部落

東軍の白河奪還戦や6月24日、西軍の棚倉城攻撃にこのルートで戦闘があった。東軍は関山上からも砲撃した。



関山〈せきさん〉：白河市街地の南東にあり、白河関跡の北北東4kmほどの所に位置する。標高619m。頂上には、聖武天皇の勅願寺として行基〈ぎょうき〉が開いたと伝わる満願寺〈まんがんじ〉が建っている。

6月12日東軍攻勢のときには、各方面の攻撃前進を同期させるため、関山上で号砲を放った。

6月24日西軍が棚倉へ進攻したとき、東軍は関山上から砲撃したが、距離がありすぎて効果が無かった。

(参考図) [白河城から南東\(搦目山\)を望む](#) 6月24日西軍の棚倉攻撃

\*堀川と白河用水の取水口の現景観

7月1日、東軍、古天神山の西軍を攻め、阿武隈川渡河。夜、二本松藩兵がひそかにこの取水口を壊し、用水を絶つ。



白河用水取水口と水神神社：現在、白河市屋敷裏東。

この写真にある工場は、現在廃止されているようである。

取水口を壊したのは上新田〈かみしんでん〉方から進出した東軍。

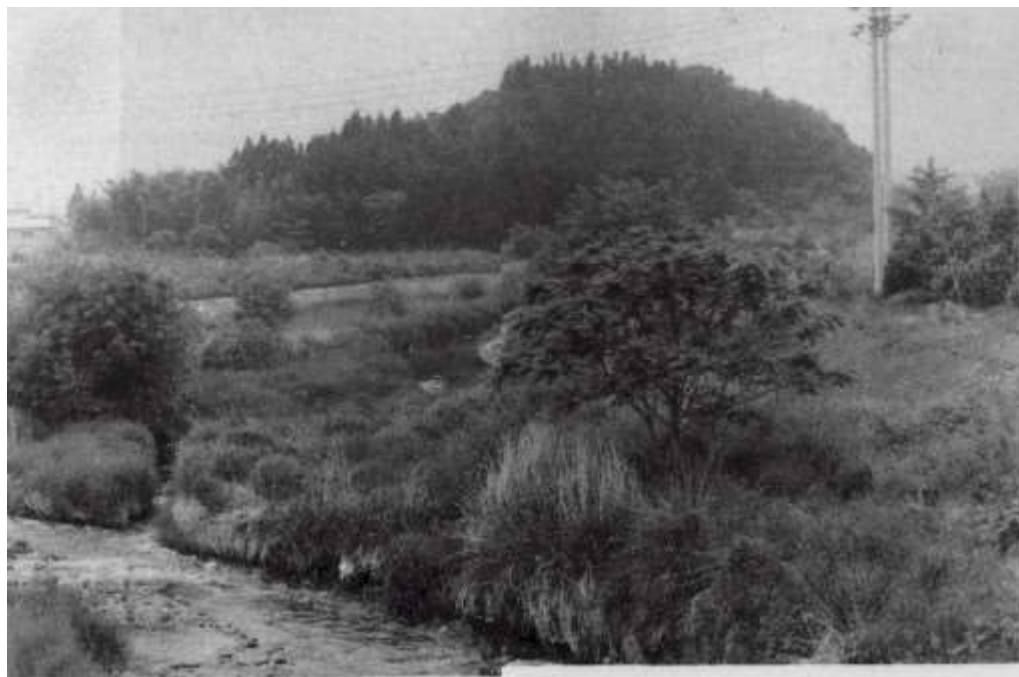
(参考図) [7月1日東軍の白河攻撃\(第6次\)](#)

⇒【7月1日の戦い\_東軍が白河西方古天神山などを攻める】

\*取水口付近の水神神社

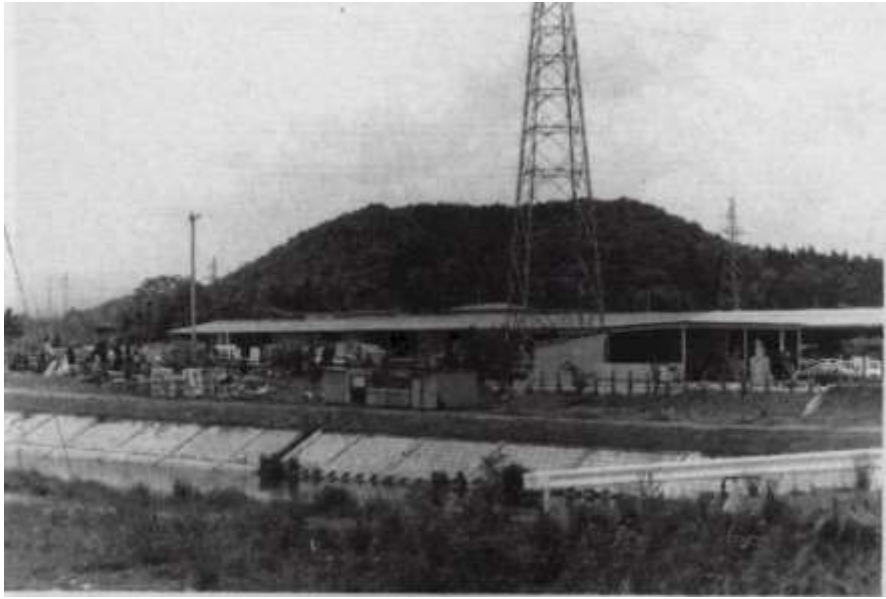


\*堀川に沿う古天神山



古天神山（ふるてんじんやま）：現在は用地造成のため消滅している。現在の白河市北真舟（きたまぶね）。

にしごうむらすぎやま  
\*西郷村梶山



梶山(すぎやま)：現在は用地造成のため変容している。現在の西白河郡西郷村米くよね)梶山(すぎやま)、梶山工業団地。

にしごうむらかみはぶと  
\*西郷村上羽太

**大平**・羽鳥口から白河への会津街道沿い。戦闘が繰り返され、沿道の部落は焼き払われた。7月1日の戦いには、東軍の飯野藩兵、下羽太で奮戦。7月**27日**の白河攻防の最終戦闘も、この方面であった。



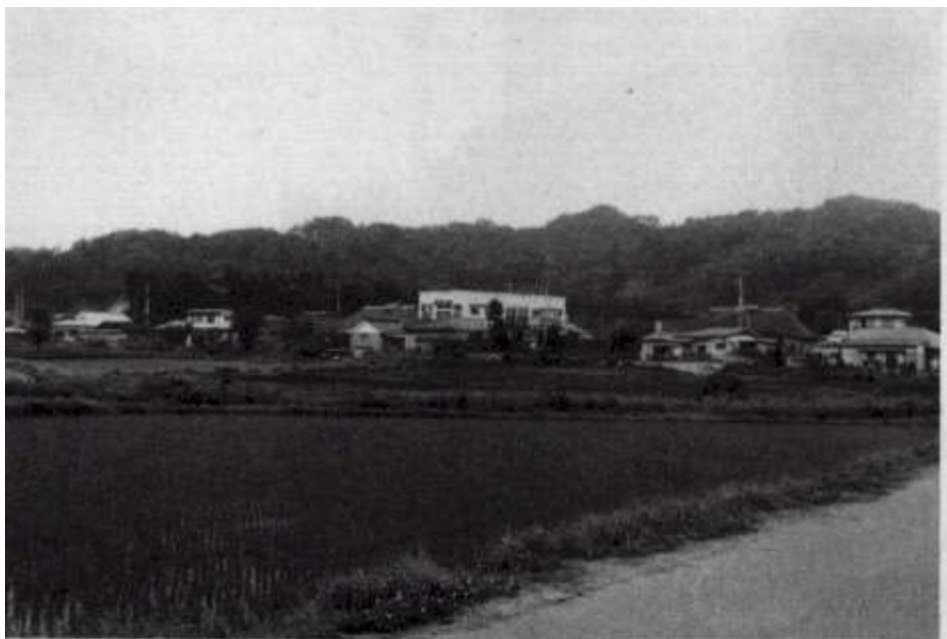
上羽太(かみはぶと)：西白河郡西郷村羽太(はぶと)漆畑(うるしばた)に上羽太バス停がある。

会津街道：ここでいう「会津街道」は大平・羽鳥経由ルートである。

復刻版の「**太平**」は誤植と思われる。

復刻版本文では、最終戦闘は7月**28日**と記している。『戊辰役戦史』にも28日の記事あり。

しもはぶと  
\*下羽太



下羽太〈しもはぶと〉: 西白河郡西郷村羽太〈はぶと〉狸屋敷〈むじなやしき〉に下羽太地区集落センターがある。

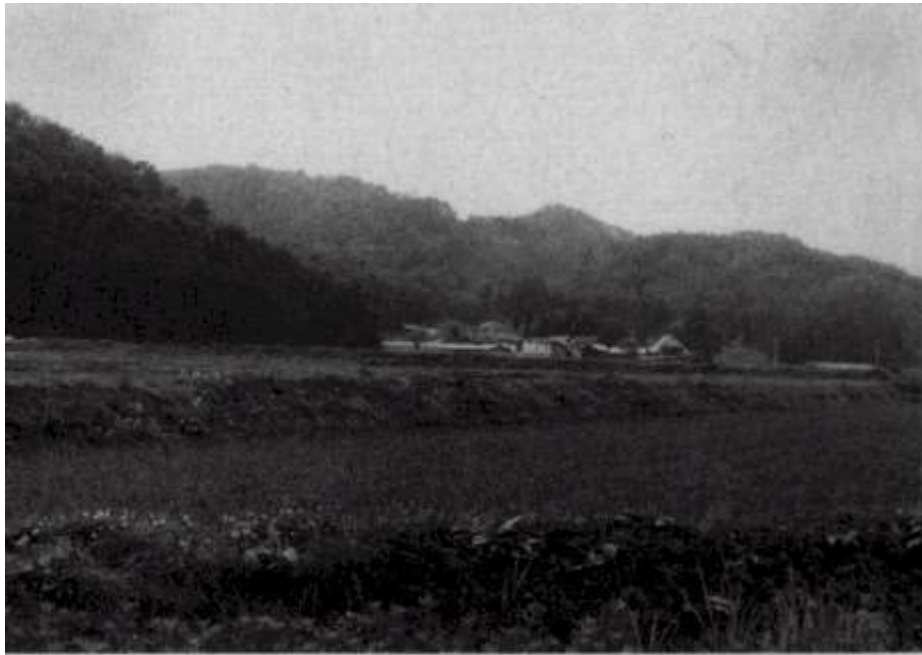
飯野藩士森要蔵等が奮闘戦死したのは、このような所。

⇒【7月1日の戦い 飯野藩森要蔵等の討死のこと】 ⇒\*戦死墓（森要蔵ほか）  
(参考図) [7月1日東軍の白河攻撃（第6次）](#)

なかはぶと  
\*中羽太でただ一軒兵火を免れた農家

現在は作業小屋となっている。(西郷村中羽太海老名氏所有)





中羽太：西白河郡西郷村羽太〈はぶと〉中羽太〈なかはぶと〉。

⇒【6月12日の戦い\_西軍が上羽太・下羽太を焼く】

⇒【上羽太・下羽太・虫笠は一軒も残らず焼かれた】

(参考図) [白河西方からの攻撃に備える](#) [東軍の攻撃を退け、北西方へ駆逐する](#)

[白河口戦争の地名地図](#)

[戊辰白河地図インデックス](#)

## ■ 供養碑・墓

復刻版ではおおよそ建立場所ごとに掲載したようだが、  
なお混在が見られたので並べ直した。

### \* 会津藩「戦死墓」

5月1日、白河口最大の激戦地<sup>いなりやま</sup>稲荷山の麓に建つ。新町<sup>しんちょう</sup>が建立。(松並<sup>まつなみ</sup>)



新町〈しんちょう〉：江戸から奥州街道をたどり、白河城下の入口にあたる町が新町で、一番町・二番町・三番町・七番町・九番町を指す。

江戸から白河へ向かう奥羽街道が稲荷山に差し掛かると、まず松並の地が手前にあり、ついで稲荷山の裾を巻いて過ぎると、九番町・七番町・三番町・二番町・一番町とたどって城下へ入って行く。

つまり新町の人々は、激戦地稲荷山に近接しており、戦場を目の当たりにしただろうし、戦死者の埋葬も行なうことになったであろう。

復刻版見出しは「会津藩」と付してあるが、必ずしも会津藩戦死者に限った碑ではないのではないか？

### \* 会津藩「銷魂碑」<sup>しょうこん</sup>

碑陰・側面に横山主税<sup>ちから</sup>ほか 304 名の氏名が刻まれている。



松並の「戦死墓」に隣接して立つ。

銷魂〈しょうこん〉：驚きや悲しみのあまり、気力を失うこと。

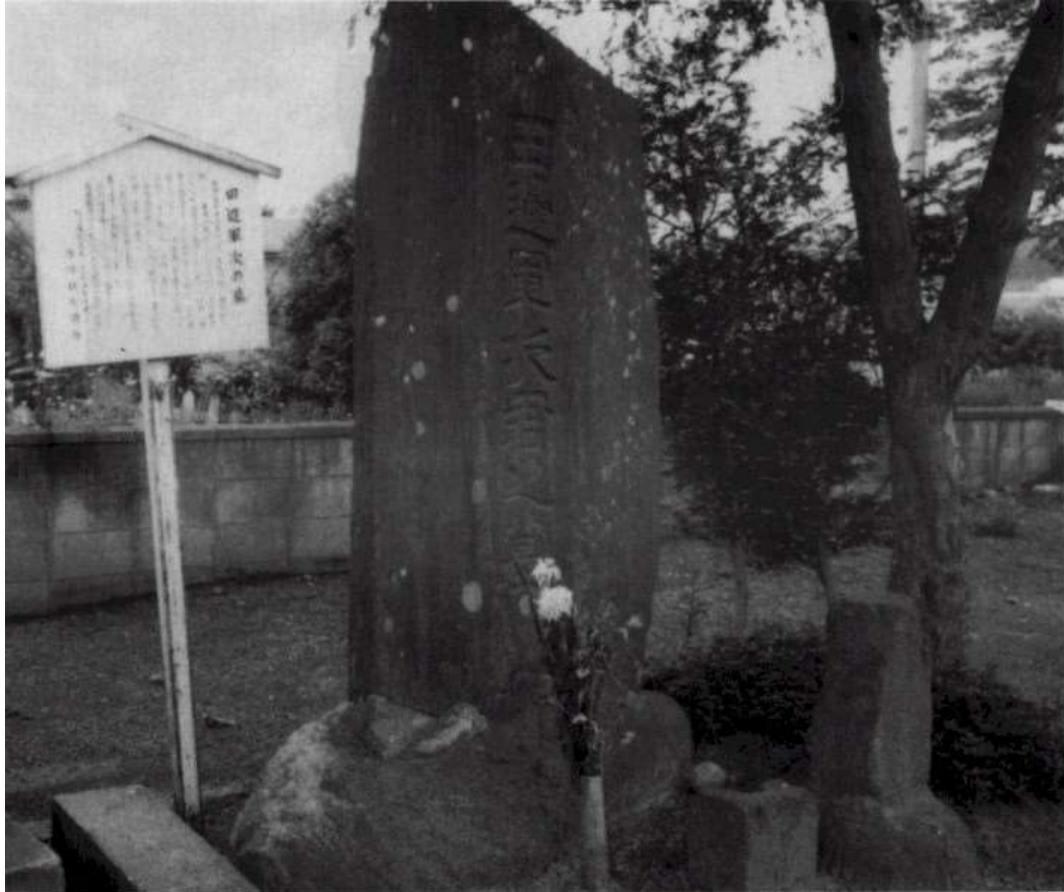
⇒【会津藩銷魂碑\_稲荷山】

\* (左)「<sup>たなべぐんじ</sup>田辺軍次君之墓」旧会津藩士建立

田辺は、5月1日の東軍の敗因は、西軍に間道を案内した<sup>おおひらはちろう</sup>白坂の大平八郎の行為にあると信じ、明治3年大平を殺害し、田辺も斬られた。享年21歳。

(右)「操刃容儀居士」

父を殺された大平の子が建てた田辺の墓。もと、<sup>かんのんじ</sup>白坂観音寺にあった。(松並会津藩戦死墓傍)



田辺軍次の墓は、今は松並の会津藩「銷魂碑」のそばに立つ。

大平八郎の婿養子直之助は、養父を殺した田辺軍次の墓をも建てて葬ったのである。

田辺軍次ゆかりの会津の人々が、その墓を白坂から当地に移し、さらに大きな墓石も建てた。それは明治29年、事件から26年後であった。その移設に伴い、どのようなやり取りがあったのか。

白坂の観音寺には、大平八郎、庄屋の白坂市之助、西軍の酒井隊長、部下の松岡、瀬口、農民の仙台屋喜七の墓もある。喜七の子孫が墓守をしていたという。

⇒【大平八郎の間道案内】【会津藩士田辺軍次、大平八郎に復讐】

⇒【田辺軍次の復讐】【田辺軍次の墓碑\_稲荷山】

⇒\*大平八郎の墓（白坂観音寺）

⇒\*戊辰戦役旧大垣藩士酒井元之丞戦死之跡（白坂）



\* 「長州大垣藩戦死六名墓」 閏4月25日の戦死者

はじめ「薩長大垣藩戦死十三人之墓」であったが、大正4年、薩藩戦死者は、鎮護神山<sup>ちんごじやま</sup>の薩藩戦死墓<sup>ごうし</sup>に合祀されたので、改刻<sup>かいこく</sup>された。会津藩士の墓碑は道路をへだててある。(松並<sup>まつなみ</sup>)



鎮護神山 <sup>ちんごじやま</sup> くちんごじやま：白河市郭内の白河小峰城合同庁舎の北にある小丘。

⇒【薩長大垣十三人之墓\_松並】

⇒\*「戊辰薩藩戦死者墓」(鎮護神山)

\* 「仙台斎藤善次右衛門戦死供養」

5月1日戦死した部下、山口七三郎・桜井伊勢松・本田三十郎の名も刻む。(米山越<sup>よねやまごえ</sup>)

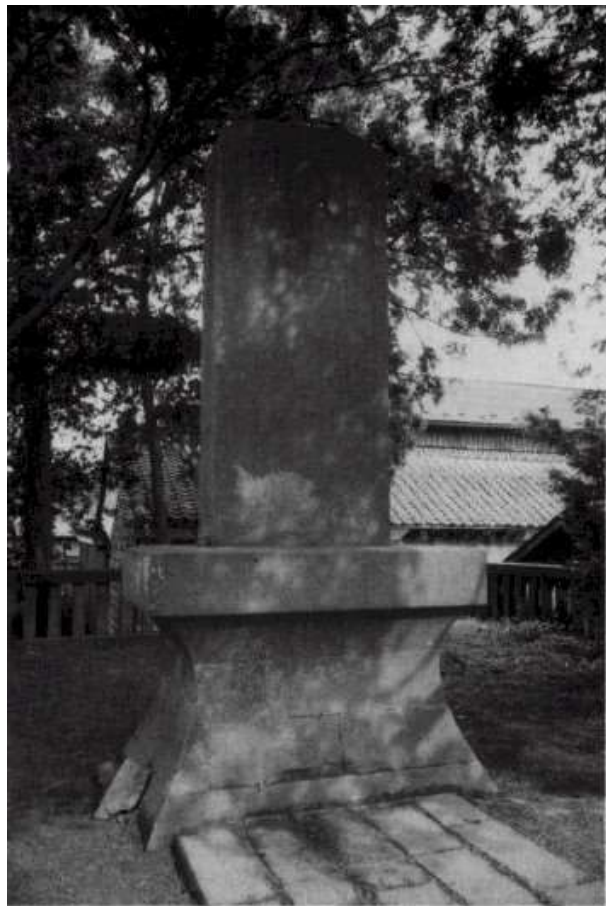


米山越：白河市米山越 <sup>よねやまごえ</sup> くよねやまごえ（稻荷山の北東方）。

⇒【仙台斎藤善治右衛門戦死供養\_米山越】

\* 「<sup>しらかわえきじんぼうしよし</sup>白河役陣亡諸士碑」( <sup>もとまちちょうじゅいん</sup>本町長寿院)

白河口に参戦した旧西軍の将、川村・大山・板垣等の<sup>ほつき</sup>発起による<sup>けんび</sup>建碑。



白河市本町(もとまち)の長寿院に立つ。

川村純義(かわむら すみよし)

大山巖(おおやま いわお)

板垣退助(いたがき たいすけ)

⇒【白河役陣亡諸士碑\_本町長寿院】

\* 西軍五藩の墓( <sup>もとまちちょうじゅいん</sup>本町長寿院)



西軍のうち、大垣・長州・土佐・館林・佐土原の5藩、92人。  
もとは薩摩藩士29人の墓もあったが、のちに鎮護神山(ちんごじんやま)に移された。  
⇒【長寿院西軍の墓\_本町長寿院】

\*長州藩森川蝶三郎外 29 名の墓 (本町長寿院)  
もとまちちょうじゅいん



\*森川蝶三郎の墓



森川蝶三郎：『白河口の戦い殉難者名簿』では「森川蝶三郎」とある。写真も「蝶三郎」と読めるようである。復刻版の見出しは「蝶五郎」となっていたが、誤植と思われる。

「長藩 官軍先鋒 森川蝶三郎 源信久墓」白河で戦死、18 歳。

⇒【長寿院西軍の墓\_本町長寿院】

にっしゅうさどわら、にいろはちろうじ、もとまちちようじゆいん  
\* 日州佐土原藩、新納八郎次外 18 名の墓 (本町長寿院)



日州〈にっしゅう〉：日向国〈ひゅうがこく〉のこと。

⇒【長寿院西軍の墓\_本町長寿院】

にいろはちろうじ  
\* 新納八郎次の墓



新納〈にいろ〉氏は、島津氏の分流という。

「日州佐土原藩 官軍 新納八郎次 暢行 行年二十八才」

\*土佐藩久時衛外 17 名の墓 (本町長寿院)  
もとまちちょうじゅいん



\*久時衛の墓



「官軍 土藩 小隊長 久時衛 惠方墓」  
読みは〈ひさ ときえ〉か？ 会津若松で戦死、26歳。

復刻版では「長久時衛」となっていたが、「長」は「小隊長」の「長」なので、読み違えと思われる。

⇒【長寿院西軍の墓\_本町長寿院】

\*大垣藩 13名の墓 (本町長寿院)  
もとまちちょうじゅいん



「大垣藩」

「鳥居勘右衛門 藤原政方 三十六歳」(銃隊長)

「河合徳太郎 藤原正光 二十歳」(銃士)

「松井於兔蔵 源義方 十九歳」(銃士)

「稲葉永蔵 源信喜 三十四歳」(嚮導)

以上は小丸山で戦死

「山田七蔵 藤原宗則 三十七歳」(軍事奉行補佐) 立石山で戦死

「坂唯蔵 藤原喬信 四十歳」(銃士) 白河で戦死

たてばやし  
\* 館林藩高山清記外 6 名の墓 (本町長寿院) もとまちちょうじゅいん



「官軍 館林藩」

「高山清記 平繁履 行年二十歳」会津若松で戦死

「永田伴次郎 源正紀 行年三十九歳」会津駒返坂で戦死

『白河口の戦い殉難者名簿』では「高山清」となっている。「記」はどこへ？

⇒ 【長寿院西軍の墓\_本町長寿院】

\* 「戦死供養塔」  
もとまち 本町が建立。(もとまち 本町 永蔵寺)



⇒ 【戦死供養塔\_本町永蔵寺】



\* 「戊辰薩藩戦死者墓」

白河・<sup>みはる</sup>三春・<sup>たいら</sup>平に<sup>さんそう</sup>散葬されていた戦死者を、大正4年旧藩士等がここに合葬した。台石に47名の戦死の場所・隊名・氏名が記されている。(白河<sup>こみねじょうあとちんごじんやま</sup>小峰城跡鎮護神山)



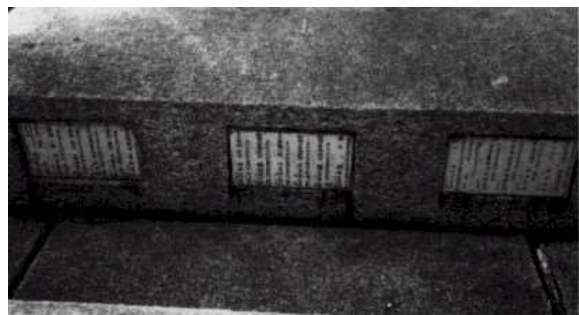
\* 同碑の側面・台座



「三春・磐城平・花見坂・長寿院 合葬」  
 三春：福島県田村郡三春町。  
 磐城平：現在のいわき市平。  
 花見坂〈はなみざか〉：白河市花見坂。松並稲荷山の西。  
 長寿院：白河市本町。  
 これらの地にいったんは埋葬されていたものを合葬した。

「一か所にまとめる」というのは、薩摩の人々の何らかの事情なのだろうか。

- ⇒ 【薩長大垣十三人之墓\_松並】
- ⇒ 【長寿院西軍の墓\_本町長寿院】
- ⇒ 【薩州藩の碑\_鎮護神山】



\* 「阿部藩戦死碑」 旧阿部藩士建立

阿部氏は、慶応3年まで白河藩主であり、翌年戊辰の年には<sup>たなぐら</sup>棚倉藩主であった。碑陰に57名の氏名刻。(南湖<sup>かがみやま</sup>鏡山 <sup>きょうらくてい</sup>共楽亭傍)



棚倉〈たなぐら〉藩士の戦死碑である。

戊辰戦争の時点で阿部家は「棚倉藩」であった。しかし阿部家は白河への再封を望んでおり、家臣の意識も「白河藩」であったかと思う。  
戦死碑の建立地に白河の景勝地である南湖が選ばれたのは、そのような理由であろう。

南湖〈なんこ〉：松平定信によって1801年に築造された日本最古の「公園」（一般民に開放された「公園」であった）。

⇒【阿部藩戦死碑\_南湖鏡山】

\* 「戊辰役戦死之碑」

周辺に散葬された12名合葬。白河有志<sup>てらこうじ</sup>建立。(寺小路)



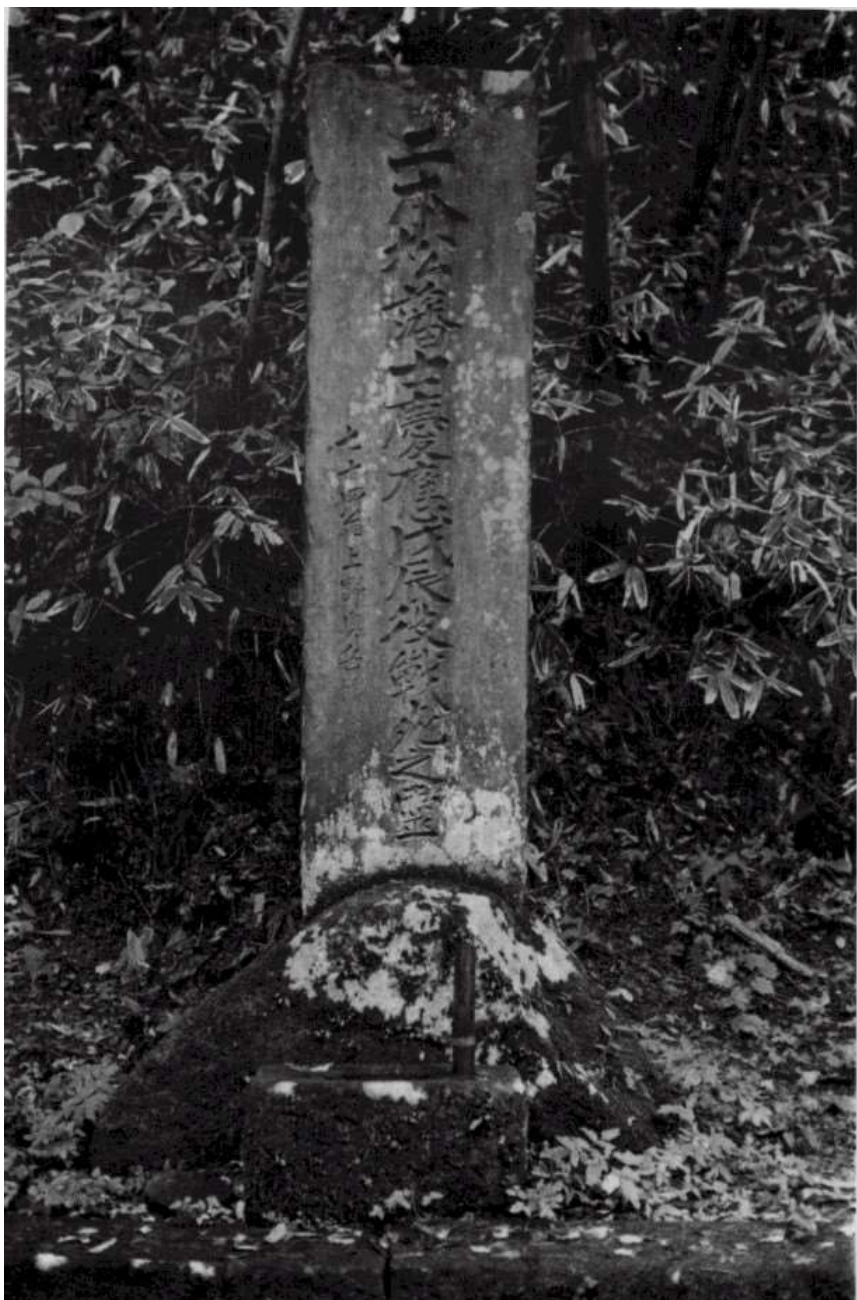
東軍兵の散葬を合わせたと思われる。

⇒【東軍は惜しむべし\_寺小路・花見坂・八竜神等に合葬】

⇒【5月1日の戦い\_渡部泰次郎の談】 ⇒【戊辰役戦死之碑\_寺小路】

\* 「二本松藩士慶応戊辰役戦死之霊」

碑陰に 23 名の氏名刻。丹羽長重公追遠会建立。(円明寺丹羽長重公廟傍)



江戸時代当初、白河藩成立時の初代藩主は丹羽長重であった。その後丹羽家は2代藩主のときに二本松へ転封となった。そして二本松藩として幕末に至った。

丹羽家初代長重の墓は、白河円明寺（地名であり、寺は無い）の丘陵中腹にある。二本松藩士は藩祖の地で戦い、死んだのだった。戦死者碑は長重墓の参道側にある。

⇒ 【二本松藩戦死者碑\_円明寺】

\*<sup>やんたがわ</sup>谷津田川に架かる<sup>えんみょうじばし</sup>円明寺橋（上）、<sup>しんばし</sup>新橋（下）

5月9日橋上で東軍兵士斬首され、川に投棄された。



円明寺橋〈えんみょうじばし〉：現在は国道 294 号バイパスが谷津田川〈やんたがわ〉を渡る。

⇒【5月1日の戦い\_小針利七の談】

⇒【南無阿弥陀仏\_馬町】



新橋〈しんばし〉：現在は新蔵〈しんくら〉通りが谷津田川〈やんたがわ〉を渡る。

この新橋にあった「南無阿弥陀仏」碑は常宣寺境内に移された。

⇒\*[常宣寺](#)（向新蔵）

\*「南無阿弥陀仏」

5月1日の戦いの翌日、東軍兵ここで斬首され、<sup>やんたがわ</sup>谷津田川に捨てられた。川は鮮血で染まり血染めの川とまでいわれた。（<sup>えんみょうじばし</sup>円明寺橋）



「捕虜はとらない、降兵は処刑する」という事例は白河口戦争を通じて東西両軍に見られるようである。

戦国時代においては、降兵を先鋒として使うことも常套的に行なわれ、ために自らの意志により降伏することは、利敵行為と同様であると考えられ、味方を裏切る行為とまで見なされたようである。

転じて、武士として忠誠を尽くす立場からは、そのような裏切り行為をはたらくことは恥ずべきことであり、降伏すること自体が武士道にもとるという意識が生じる。

また、そのような意識の裏返しとして、生き残った敵には「名誉の死」を与えるべきだと考え、助命を請う敵兵を軽侮することになり、ひいては捕虜処刑に走る結果になるようである。

このような傾向は、のちの日本軍にも（一時期を除いて）引きずられていくことになる。

⇒【南無阿弥陀仏\_馬町】

じょうせんじ  
\* 常宣寺



常宣寺〈じょうせんじ〉：白河市向新蔵〈むかいしんくら〉にある。

和泉式部〈いずみしきぶ〉が今の白河市表郷〈おもてごう〉番沢〈ばんざわ〉硯石〈すずりいし〉の地に庵を結んだのが発祥という伝説あり。

\* (右)「会津藩戊辰戦死十二士之墓」

碑陰に氏名刻。

(左)「南無阿弥陀仏」

地元の新蔵町・新地が建立。(向新蔵 常宣寺)



新地〈しんち〉：白河市に「新地」という字は無い。当時の白河町の新しい街区・遊郭街ということで「新地」と呼ばれたのかと思われる。向新蔵を指す？

⇒【会津藩十二士之墓 向新蔵常宣寺】

「南無阿弥陀仏」碑は、もと谷津田川の新橋（向新蔵）のたもとにあったもの。

⇒\*[谷津田川に架かる円明寺橋・新橋](#)

たなぐら  
\* 棚倉藩士「阿部内膳正熙之墓」  
むかいしんぐら じょうせんじ  
阿部は十六人組の勇将。(向新蔵 常宣寺)



阿部内膳正熙：阿部姓なので藩主の一族か？刀槍甲冑で武装した「十六人組」を率いて戦う。

⇒ 【棚倉藩阿部内膳討死\_商人小崎直助の助力】

⇒ 【仙台藩烏組と棚倉藩十六人組】

⇒ 【阿部内膳正熙之墓\_向新蔵常宣寺】

むかいしんぐら じょうせんじ  
\* 「明治戊辰戦死之墓」(向新蔵 常宣寺)



「明治戊辰」と刻まれているのが珍しい。

⇒ 【明治戊辰戦死之墓\_向新蔵常宣寺】

\*会津藩士「三坂喜代介」の墓（向新蔵 <sup>むかいしんくら</sup> 常宣寺 <sup>じょうせんじ</sup>）



三坂喜代介：会義隊。慶応4年閏4月25日、白河にて戦死。22歳。

会義隊〈かいぎたい〉：会津藩の徴募兵の部隊。隊長は野田進。

野田進〈のだ すすむ〉：会津藩士として幕末の諸局面に活躍。戦後は学校に勤める等を経てのち、伊佐須美神社の禰宜となる。

伊佐須美神社〈いさすみじんじや〉：福島県大沼郡会津美里町〈あいづみさとまち〉（もと会津高田町〈あいづたかだまち〉）にある。陸奥国二の宮。訳者の母の名の由来となっている。

\*（左）「戦死塚」（右）「海老名衛門君碑銘」（向新蔵 <sup>むかいしんくら</sup> 龍興寺 <sup>りゅうこうじ</sup>）



海老名衛門〈えびな えもん〉：会津藩軍事奉行。慶応4年5月1日、白河米山越〈よねやまごえ〉（稻荷山の北東方）にて戦死。52歳。

⇒【会津藩横山主税・海老名衛門・一柳四郎左衛門、討死】

⇒【海老名衛門君碑銘\_向新蔵龍興寺】

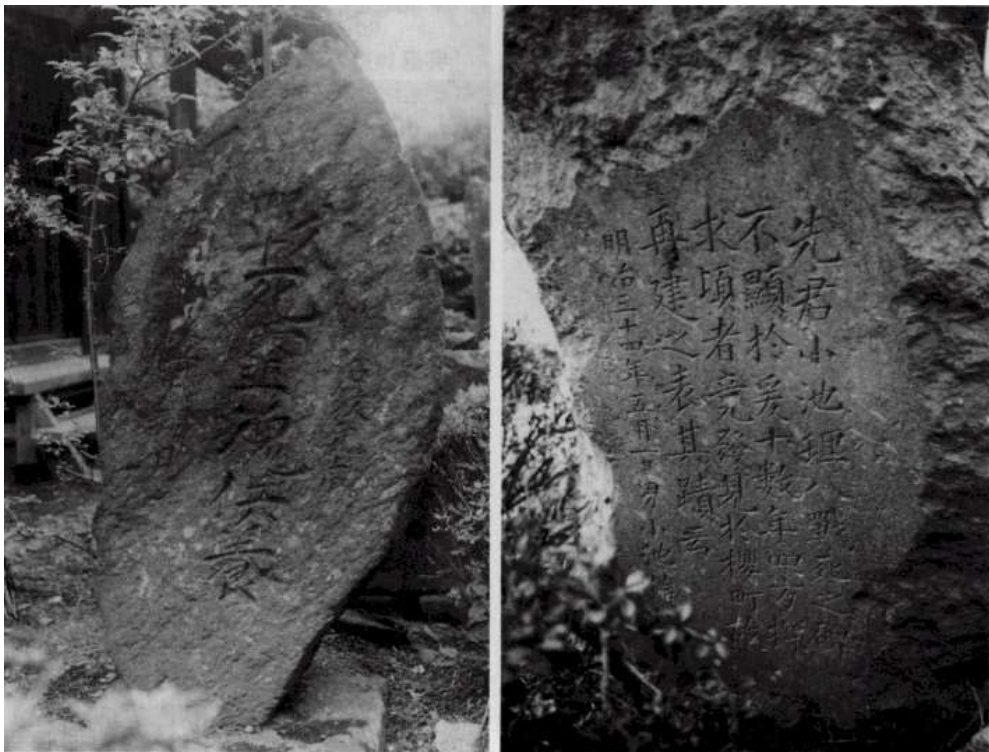
＊「戦死人供養」

周辺に散葬された11人合葬。桑名<sup>くわな</sup>ト圓<sup>ぼくえん</sup>建立。



白河大工町〈だいくまち〉の皇徳寺〈こうとくじ〉にある。  
中町〈なかまち〉庄屋の桑名清兵衛（ト圓〈ぼくえん〉）が東軍兵の散葬を合わせて建てたものである。東軍供養碑建立者の個人名が知れるのは珍しい。  
⇒【町人ト圓が建てた供養碑\_大工町皇徳寺】

＊<sup>たなぐら</sup>棚倉藩士小池理八「戦死靈魂供養」と碑陰銘（<sup>はちまんこうじ</sup>八幡小路 <sup>かんせんじ</sup>関川寺）



小池理八〈こいけ りはち〉：慶応4年5月1日、白河桜町口の戦いで戦死。

「先君小池理八、戦死之碑不顕於爰十数年、四方探求、頃者竟発見於桜町、故再建之、表其蹟云 明治三十四年五月一日 男 小池信好」  
先祖小池理八の戦死の碑が不明で十数年あちこちを探したが、桜町において発見したので碑を再建し、その事跡を表わす。明治34年5月1日 子孫・小池信好。  
⇒【小池理八供養碑\_関川寺】



\* 「仙藩石川大之進<sup>みなもと</sup>源春幸之墓」(八幡小路<sup>はちまんこうじ</sup> 関川寺<sup>かんせんじ</sup>)



石川大之進：仙台藩一番大隊銃士。  
慶応4年7月15日、根田方面の戦闘  
で負傷し、10月27日に死亡。

\* 「戦死供養塔」(金屋町<sup>かなやまち</sup> 関川寺空塚傍<sup>かんせんじからぼり</sup>)



「明治二年巳年」  
東軍戦死者の慰霊碑と思われる。

戊辰の供養塔として最も小さいとい  
われる。

⇒【戦死供養塔\_妙閑寺・関川寺】

\* 「芸藩加藤善三郎之墓」

戊辰戦争において、農民は軍夫として徴発され、労役を強いられた。戦争が終わって西軍が引き揚げる段階の11月3日、芸州藩士加藤は、人夫として労役中の農民の無礼を怒り斬殺した。藩より切腹を命ぜられた加藤は、萬持寺にて従容として散華した。25才。(巡り矢萬持寺)



この事件の真相については、近年芸州（広島）側から異論が出ている。つまり、善三郎は芸州藩徴用の軍夫が逃亡したのを追跡していたのだが、誤って別人である長州藩徴用軍夫を斬殺してしまったもので、「私用のために運搬を強要」したのではないということである。思うに、事件の内情は一般民には告知されないだろうから、街道上の目撃談から再構成された物語が独り歩きしたのではないか。ともあれ、逃亡したとはいえ軍夫を斬殺する権限は善三郎には無く、そのうえ別人を誤認殺害したのだから、翌日切腹という即決となった。ただし「切腹」であるから、善三郎の武士としての面目は配慮されたことになる。

萬持寺〈まんじじ〉：白河市巡り矢〈めぐりや〉。

⇒ 【芸州藩士加藤善三郎墓\_巡り矢萬持寺】

⇒ 【加藤善三郎と農夫】

⇒ 【『藝藩志』から】

\* 「戦死供養塚」

閏4月20日、会兵が白河城を襲った際、小峰寺住職は、梵鐘をついて報じたので、狙撃されて死んだ。(道場町 小峰寺)



(参考図) [閏4月20日幕会軍の白河城奪取](#)

⇒ 【小峰寺住職が撃ち殺される】

⇒ 【5月1日の戦い\_後藤みよの談】

＊「福島藩士十四人碑」

6月12日、東軍の第4次白河攻撃に、六反山<sup>ろくたんやま</sup>で戦死。碑陰に氏名刻。(向寺<sup>むかいでう</sup> 聯芳寺<sup>れんぼうじ</sup>)



福島藩兵は、金勝寺山方面から白河城を目指すも、阿武隈川北岸の丘陵地で敗退。

(参考図) [6月12日東軍の白河攻撃\(第4次\)](#)

⇒【6月12日の戦い\_福島藩兵六反山で討死】

⇒【福島藩戦死碑\_向寺聯芳寺】

＊「戦死供養塔」

150余名合葬。白河有志建立。(女石<sup>おんないし</sup> 会津街道と仙台街道の岐路)



「戦死供養塔」は諸所にあるが、この供養塔はとくに仙台藩戦死者を葬ったものか？  
裏面に「人数百五十人余葬之」とあり。

「仙台藩士戊辰戦歿之碑」とともに女石の街道側に玉垣に囲われて建っている。

⇒【戦死供養塔\_女石】

\* 「仙台藩<sup>せんぱう</sup>士<sup>し</sup>戊辰戦<sup>ごしん</sup>歿<sup>ごつ</sup>之碑」旧仙台藩有志建立



復刻版では「**士**」が抜けている。

前記「戦死供養塔」とともに女石の街道側に玉垣に囲われて建っている。

⇒【仙台藩戊辰戦死碑\_女石】

⇒【仙台藩の白河口戦争死者\_龍蔵寺記録による】

\* 「遊女<sup>しげじょ</sup>志げ女の碑」

越後三条<sup>えちごさんじょう</sup>の生まれ。幼くして白河の妓楼坂田屋に身を売られる。時に閏4月、白河城にて会津攻撃を指揮する西軍参謀<sup>せらしゅうぞう</sup>世良修蔵と情を結ぶ。このため、東軍兵士に殺害された、と伝える。志げ女は俳句にも造詣が深かった。「まつ間なく人の出入や花盛り」志げ女。  
(女石<sup>おんないし</sup>)



越後三条〈えちごさんじょう〉：現在の新潟県三条市。

碑は地元の山田喜蔵氏が昭和29年（1954）建立。

「志げ女は越後国三条の生まれで、白河の旅籠坂田屋に抱えられていた。戊辰の役で官軍の参謀世良修蔵は白河に入った際に志げ女の客になった。しかし世良は、白河は危険と察して白河を逃れ出たという。世良を狙っていた某藩士は敗残の浪人となり、志げ女が世良を逃がしたと恨み、志げ女を殺害した。志げ女が殺されたと知った坂田屋の妓夫は、浪人を追い、女石で仇を討った。志げ女の法名は梅箕貞顔信女。享年二十二歳。明治2年のことという。」

志げ女は、遊女という運命にありながら、俳句のような教養も身につけ、健気に生きていた。世良の危機を志げ女が助けるという局面があったのかどうかは分からないが、瀬上・姉齒同様に世良を殺そうと狙っていた者がいて、一足違いに世良を逃した恨みから、明治2年にもなってから志げ女を殺害したのだろうか。志げ女は坂田屋の労働者であって、坂田屋の妓夫は同僚なのである。妓夫は志げ女に思いを寄せていたのかもしれない。町人が殺気だった浪人を追いかけるとは、よほどのことだろう。妓夫に仇討ちされた浪人はどうなったのだろうか？

\* 「戊辰戦死供養塔」(小田川 <sup>こたがわ</sup> <sup>やくしどう</sup> 薬師堂)



薬師堂：白河市小田川（こたがわ）小田ノ里（おだのさと）にある。

小野薬師堂：（白河市：歴史・観光・見所より）

「小野薬師堂は白河市の郊外の奥州街道の旧小田川宿入口付近に位置し、創建は大同年間（806～810）と伝わる古社で宝積院の末寺、医王山成就院白山寺の本尊でした。伝説によると『小野小町は故郷である秋田に帰郷する際小田川付近で病にかかり床に伏せてしまいます。そこで小町は薬師如来に病が治るよう”南無薬師かけし諸願の根も切れば 身より薬師の名こそ惜しけれ”と詠い祈願したところ薬師如来が夢枕に立ち”村雨の 雨は一時のかりの宿 みのかさなれば ぬぎすててゆけ”と応えました。小町が目を覚ますと病がすっかり平癒し無事秋田へ帰郷することが出来ました。』とあります。この伝説により古くから信仰の対象となり奥州街道の往来時には道中祈願として多くの人達が参拝したそうです。」

原書に「観音堂境内」供養塔の記事があるが、この薬師堂の供養塔とは別のものなのか？ それとも同じもので、原書の「**観音堂**」は誤記か？  
⇒【戊辰戦死供養塔\_小田川観音堂】

\* 「会津丹羽新吾宗方之墓」(小田川 <sup>こたがわ</sup> <sup>ほうしゃくいん</sup> 宝積院)



宝積院（ほうしゃくいん）：白河市小田川（こたがわ）行屋久保（ぎょうやくぼ）にある。

丹羽新吾（しんご）宗方（むねかた）：会津藩猪苗代大砲組頭。7月15日、根田村（ねだむら）で戦死。33歳。

墓碑に「後殿而戦死」とあるので、味方が退却におちいる中で、殿（しんがり）を務めて討死にしたものか。

（参考図）  
[7月15日東軍の白河攻撃（第7次）](#)

\* 「仙藩佐々木廣之助の墓」(小田川 <sup>こたがわ</sup> 宝積院 <sup>ほうしゃくいん</sup>)



佐々木廣之助：仙台藩の浜田郡治隊の卒。6月12日、白河にて戦死。

⇒【仙台藩佐々木廣之助之墓\_小田川宝積院】

\* 「戦死供養」

側面に「会津仙台二本松四十九名」。(桜岡 <sup>さくらおか</sup>)



桜岡：白河市大〈だい〉桜岡〈さくらおか〉。

⇒【戦死供養\_桜岡】

- \* 「戊辰役戦死之碑」 白河有志建立  
 周辺に散葬されていた 42 名を合葬。(八竜神)<sup>はちりゅうじん</sup>



東軍兵の散葬を合わせた。  
 ⇒ 【戊辰役戦死之碑\_八竜神】

- \* 「戦死数名埋葬塔」<sup>からめむら</sup> 搦目村が建立。(搦目)<sup>からめ</sup>



復刻版では「塚」だが、原書では「塔」としてある。  
 東軍兵の散葬を合わせた。  
 明治 23 年の大洪水で流されたが、のちに川底から掘り出されたという。  
 この写真では「葬」の字のところまで埋まっているようだが？ 昭和 63 年当時の状態？  
 原書に紹介してある搦目の「戊辰戦死之碑」が隣り合って建っている。  
 ⇒ 【戊辰戦死之碑\_搦目】

\* 「官軍兵食方 宇都宮藩増淵勝蔵之墓」  
5月20日、細倉で戦死。(田島 清光寺)



復刻版「蒲」は「藩」の誤植。

清光寺〈せいこうじ〉：白河市田島〈たじま〉黒谷〈くろたに〉にある。

増淵勝蔵：宇都宮藩兵食方。5月20日、細倉で戦死。17歳。

細倉：白河市刈宿〈かりやど〉細倉〈ほそくら〉。

⇒【宇都宮藩増淵勝蔵之墓\_田島清光寺】

(参考図)

[白河口戦争の地名地図](#)

おおひらはちろう  
\*大平八郎の墓

西軍の道案内を勤めた大平八郎は明治3年7月13日、旧会津藩士田辺軍次によって白坂の鶴屋旅館において「会津藩の仇」として殺された。しかし田辺もまた、大平の家族によって「親の仇」として斬殺された。大平は享年43才。(白坂 観音寺)



観音寺：白河市白坂。

⇒【大平八郎の間道案内】【田辺軍次の復讐】【田辺軍次の墓碑】

⇒[田辺軍次の墓](#)

郷土史家石井勝弥氏の『大平八郎と白河戦争』によると、大平は京の桂宮の屋敷で2年半にわたり奉公し勤皇思想を強めたという。白河口戦争においては積極的に西軍に協力したものだだろう。大平とすれば西軍の一員としてあることは本望であり、功をなして褒賞を得たことは誇りであったろう。しかしそれだけに、会津藩に対しては明確に敵対する立場となった。会津藩士が大平個人を仇と考えるのは逆恨みであるが、“武士に従うべき町人”が戦賞によって栄えている姿は我慢ならなかったのだろう。田辺墓碑のとおりであれば、大平は「貴藩の旅館なり」と言って鶴屋へ誘っており、田辺が何者であるか悟っていたのかもしれない。その後切りつけられながらも大平は、いったんは田辺を押さえつけており、体格的にも優勢だったかと思われる。それでも大平は、田辺と話し合う道を選んだのである。しかしそれは復讐心に燃える若者には通じなかった。婿養子直之助が田辺をも弔ったのは、八郎の真情に合うものだったのではないか。

白坂の観音寺には、庄屋の白坂市之助、西軍の酒井隊長、部下の松岡、瀬口、農民の仙台屋喜七の墓もある。喜七の子孫が墓守をしていたという。

白坂市之助は閏4月25日、西軍に呼び出されて白坂宿の町はずれで殺された。見せしめのための犠牲という。

⇒【白坂市之助暗殺のこと】



\* (左) 長州藩岡正義の墓 (右) 同藩浅野正章の墓 (白坂 <sup>しらすか</sup> <sup>かんのんじ</sup> 観音寺)



岡正義：長州藩士。5月1日（あるいは閏4月25日）、白坂で戦死。21歳。

浅野正章：長州藩士。6月12日、白坂で戦死。

⇒【白坂村観音寺の墓\_白坂観音寺】

\* 大垣藩酒井元之丞・瀬口興作・松岡惣兵衛の墓 (白坂 <sup>しらすか</sup> <sup>かんのんじ</sup> 観音寺)



酒井元之丞：大垣藩銃隊長。5月26日、白坂で戦死。25歳。

瀬口興作：大垣藩銃隊士。5月26日、白坂で戦死。22歳。

松岡惣兵衛：大垣藩銃隊士。5月26日、白坂で戦死。18歳。

⇒【白坂村観音寺の墓\_白坂観音寺】

\* 「戊辰戦役旧大垣藩士酒井元之丞戦死之跡」

5月26日、白坂での交戦で、大垣藩士3名、黒羽藩士2名戦死。白坂の農民1名死。この碑は、明治39年酒井の妹が建立。(白坂、旗宿道の岐路)



旗宿(はたじゆく)道:白坂から南東へ、金堀を経て旗宿(白河関跡がある)へ至る。

「白坂の農民1名死」が「農民・仙台屋喜七」「農夫廣川喜七」だろうか。

⇒【大垣藩酒井元之丞戦死の跡\_白坂】

(参考図) [5月26日同盟軍の第1次白河奪還攻撃計画](#)

\* 「戦死供養塚」(西郷村米)



米の字山下と字杉山前の境あたりにある。

⇒【戦死供養塚\_西郷村米】

\* 「戦死供養塔」 (西郷村米<sup>にしごうむらよね</sup>)



西郷村米道場久保の路傍に建っている。

⇒ 【戦死供養塔\_西郷村米】

\* 「戦死墓」

飯野藩士森要蔵父子ほか 3 名と会津藩士 15 名。森は、北辰一刀流千葉周作道場の四天王の一人。(西郷村羽太<sup>にしごうむらほぶと</sup> 大龍寺<sup>だいらりゅうじ</sup>)



⇒ 【7月1日の戦い\_飯野藩森要蔵等の討死のこと】

⇒ 【森要蔵父子ほか戦死墓\_羽太大龍寺】

⇒ \*下羽太

(参考図) 7月1日東軍の白河攻撃 (第6次)



大龍寺〈だいらりゅうじ〉：西白河郡西郷村羽太（大字）狸屋敷（字）にある。

飯野藩士

森要蔵 59歳

森虎尾 16歳

多湖宗三郎

花沢金八郎 18歳

小林寅之助

いずれも慶応4年7月1日、羽太村で戦死。

飯野藩：上総国周淮郡〈すえぐん〉飯野〈いいの〉（現在の千葉県富津市下飯野）の飯野陣屋に藩庁を置いた。藩主・保科正益〈まさあり〉。会津松平家とは保科正之を通じて親戚関係にある。佐幕派家臣を処刑して新政府への恭順を認められた。

\*二本松藩士大河原弥太郎および斎藤孫吉の墓（<sup>にしごうむらたかすけ</sup>西郷村高助 <sup>はんそうじ</sup>班宗寺）



班宗寺〈はんそうじ〉：西白河郡西郷村鶴生〈つりゅう〉高助〈たかすけ〉にある。

大河原弥太郎：二本松藩原太左工門組足軽。

斎藤孫吉：二本松藩青山伊右衛門組足軽。

ともに6月12日、西郷村米〈よね〉椋山〈すぎやま〉で戦死。

⇒【二本松藩大河原弥太郎の墓\_高助班宗寺】

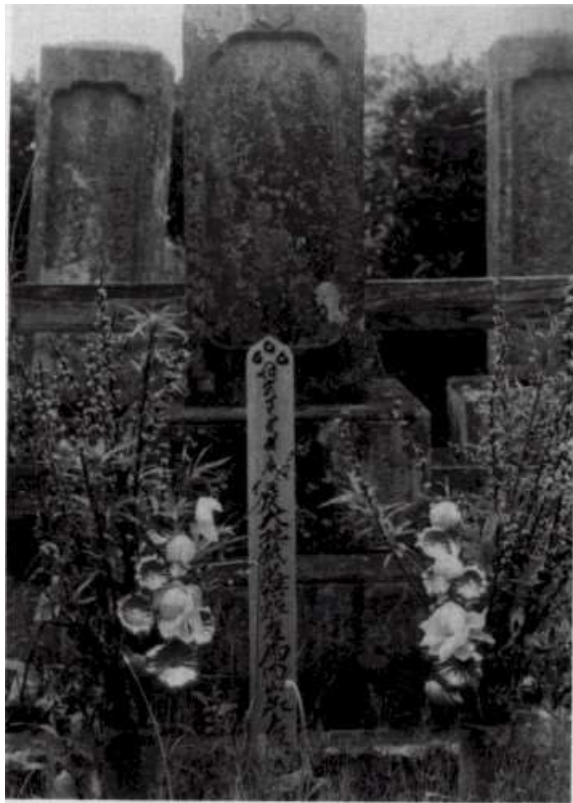
⇒【二本松藩斎藤孫吉の墓\_高助班宗寺】

⇒\*[西郷村椋山](#)

（参考図）[6月12日東軍の白河攻撃（第4次）](#)

## \*農民<sup>うちやまち ゆう えもん</sup>内山忠之右衛門の墓

西軍の道案内を勤め、**西軍**を勝利に導いたとして、慶応4年8月会津藩士によって斬首された。<sup>きょうねん</sup>享年42才の<sup>やくどし</sup>厄年であった。<sup>にしごうむらくろかわ</sup>(西郷村黒川)



復刻版の「**東軍**を勝利に導いた」は誤植。

西郷村黒川：西白河郡西郷村小田倉〈おだくら〉黒川東〈くろかわひがし〉。

⇒【内山忠之右衛門の道案内】

内山家は、会津産米を江戸へ回送する道筋（原方街道）で問屋〈といや〉を営み、小田倉村〈おだくらむら〉黒川（現在は西郷村の一部）の庄屋を務めた。

小田倉村は高冷地で実入も少ない貧しい村であり、かつ、白坂宿の助郷村として重い負担を強いられていた。忠之右衛門は村内では比較的富裕であったかもしれないが、庄屋というのは支配者と村民の間に立つ苦労役であって、ときに困窮者の支援も自腹で行なったり、年貢を取りまとめ完納に苦心する役割であった。

西軍が忠之右衛門に接触したのは、閏4月25日の攻撃失敗の後と思われる。道案内せよとの命令を拒否すれば命の危険があり、忠之右衛門に否応の選択はなかつただろう。しかも「年貢半減」と言われれば、貧しい村の庄屋としては、期待せざるをえなかつた。小田倉村は慶応3年から幕領であったから、その支配は新政府が引き継ぐものとも思われた。

そして忠之右衛門等が問道を案内したことにより、西軍は5月1日の戦いに大勝を得たのだが、忠之右衛門にとって不運だったのは、西軍が勝ち取ったのは白河城下と奥州街道沿いの限られた地域だったことである。小田倉村をはじめ、白河周囲の村々はなお東軍の勢力下に残された。

言い伝えによると、忠之右衛門は会津軍に対して西軍の動向を報告もしたという。忠之右衛門としては西軍とも東軍とも上手く距離をおいて、戦乱から村を守りたいという気持ちだったのだろう。しかしそれは考えが甘かった。会津藩は自軍の勢力下の農民が利敵行為を働いたことを見逃さなかつた。忠之右衛門とは会津産米を回送する問屋業という関係もあったから、なおさら「裏切られた」という憤慨も生じたであろう。5月18日、忠之右衛門は会津軍によって拉致・拘禁される。

その後の戦局に伴い会津軍は西方へ駆逐され、忠之右衛門も会津軍の根拠地である大平〈おおだいら〉（羽鳥の西）へ連行されていた。

そして8月21日、西軍によって母成峠の守備が突破され、翌々日には会津若松城下に西軍が殺到した。

この敗報を三代・勢至堂口の会津軍が受けて、会津若松へ向け後退したのは23日と考えられる。23日には三斗小屋（那須岳西方）でも西軍（黒羽藩）の進攻があった。それらの近傍である大平の会津軍の退却については経過不詳だが、24日には東山温泉において勢至堂退却隊と合流している。

忠之右衛門が斬首されたのは8月22日と伝えられるが、だとすると母成峠の敗報がもたらされる直前のタイミングであり、たまたま虜囚を「一斉処分」したもののか。会津軍は直後に会津若松へ向けて退却することになるので、「会津軍に妻が呼び出される」時間的余裕はない。あるいは処刑はもっと早い時期に行なわれたのかもしれないし、または妻は会津軍に呼び出されたのではなく、会津軍の撤退後に忠之右衛門の消息を求めて首級を発見したのかもしれない。どうであれ「並んでいる首級の中から夫の首を持ち帰った」という体験は凄惨である。

訳者は忠之右衛門の子孫ということもあり、このような忠之右衛門の運命には特別の感慨がある。とにかく戊辰戦争白河口の戦いが、東軍対西軍とか勝者敗者という単純なものではなく、多くの人々のかけがえのない生きざまが刻印され、現代まで脈々と繋がる出来事であった、ということは強調しておきたい。